

光記念館 研究紀要 人文科学 2006.3

Hikaru Memorial Museum

第4号

平成16・17年度

Hikaru Memorial Museum



www.hikarukinenkan.or.jp

目次

論説

書人 右卿の軌跡

岡田泰六..... 5

展示研究

画家の生きざまを紹介する展示として

「横山大観とその時代展～日本画に新しい視野を開いて～」

河西珠実..... 11

古代文明展示の試み「インカ文明展～古代アンデスの秘宝～」

松本庸子..... 17

資料紹介

エクアドル中部高地 トゥンカワン土器について

長谷川悦夫..... 21

講演会

アンデス最古の金製品発掘談

大貫良夫..... 23

エジプト文明親子講座

村治笙子..... 33

縄文の輝き講座

岡田康博..... 38

博物館活動報告

博物館における高齢者レミニセンス・セラピー（回想法）とアウト・リーチ活動

吉井隆雄..... 48

書人 右卿の軌跡

岡田泰六

光記念館 理事長

はじめに

漢字のルーツは殷代の「甲骨文字」であって、それらには象形文字（漢字の原型）が刻されていた。亀の甲羅や獣骨に刻された甲骨文字は絵文字から派生したものであり、今日、漢字の価値が失われずにいるのは漢字の象形性にもよるであろう。獣骨や亀甲に刻まれた中国文字の記録は紀元前1300年頃まで遡る。中国の文字の多くは表意記号と表音記号からなり、あらゆる言葉と概念に文字が当てられており、この表記法は今も原則的に変わっていない。

その筆記具としての筆の存在は陶器の絵付けなどから殷をはるかに遡ると思われるが、書（筆により文字を書く）方式は殷時代（陶器への毛筆書「祀」）より千数百年を経るうちに、意思、記録を伝達するためのあらたな媒体（木片や竹、絹や紙など）が出現し、時代によって変容していった。

漢の時代は400年にわたり、前漢時代の西域出土の簡牘類は木や竹だけではなく、紙や絹にも文字が書かれ、その遺物は残紙、布帛と呼ばれている。そして中期以後には、刻石類、つまり数多くの立派な碑文が作られている。

東晋には古今を通じて書聖といわれ尊ばれる王羲之が出現し、八分、隸、行、草、章草、飛白などの各体の書をよくしたといわれている。

次に隋代を経て唐代になると中国書の黄金期を迎えた。特に初唐の三大家と言われる欧陽詢・虞世南・褚遂良はそれぞれ楷書において「九成宮醴泉銘」・「孔子廟堂碑」・「孟法師碑」など後世不朽の名作を誕生させている。

唐最盛期には顔真卿が現われ、力強い楷書によってのちに王羲之の古法と比して新法という力感あふれる筆法を以て活躍した。またこの時期は唐の都の国際性を反映し、西域文化の影響も受けて唐代芸術の花が開いた。太宗皇帝自ら書蹟を撰書し家臣に習わせたり、集字で「聖教序」の碑を建てたりして書の隆盛につとめた時代であった。

日本に書が入ってきたのは飛鳥時代、聖徳太子の「法華義疏」を以て嚆矢とする。日本には漢字を知る以前から神代文字を使っていたという説があるが、漢字を筆で書くことにより大陸の文化は日本に流入し根付いていった。

平安時代は宮廷文化が開花し、天皇や貴族らが高価な紙に夢のように美しい書を書き遺している。嵯峨天皇、空海、橘逸勢らいわゆる三筆といわれる名筆も出現して日本書道史を飾る名蹟が書かれていった。また、小野道風、藤原佐理、藤原行成のいわゆる三蹟による和様書の成立が日本の伝統的書道を作り上げてきた。

漢字は日本の風土の中で見事な文化を開花させていった。筆者はこの時代を「日本のルネッサンス時代」として位置づけたいと思う。

日本の国語の原点は漢字を媒体にした「話す」「聞く」「書く」の三原則で構成されている。このことは中国も同じであるが、今日の中国では「漢字の略体化」が進んでいる。日本も漢字の省略化はあるが、公文書においては未だに遠い昔に中国から渡来した旧漢字も常用されている。国の発展にともなって漢字の略体化や省略化も必然的に行われる事は理解できるが、その基本漢字のもつ“漢字の意義”を学習する必要があるし、その重要性を次世代に伝えている責務がある。「漢字」そのものが確かな意味を持っていることを再認

識しなくてはならない。

漢字は書として歩き始め、日本では素晴らしき書芸術として確立され、また人間修養の手立てとして茶道、華道とともに教養の一環として定着している。

——古典を学ぶには中国東晋から日本の三筆、三蹟までの書を研鑽する必要がある。そして近代においてその王羲之系統の書法を受け継いだ空海を、炎の情熱で学んだのが日本の書道家手島右卿その人であった。——

右卿の死後、筆者は必要に迫られて手島右卿の創始した書について小論を書くようになった。しかし書に関心の深い人ならともかく、書を初めて学ぼうとする人、あるいは右卿とはいかなる書家であるかを知ろうとする人に対して唐突に右卿の書を紹介しても、にわかに理解してもらうことは困難と思われた。

書は難しいもの、という観念が広がっているから右卿の提唱した古法や象書なる概念を理解してもらうには、書道史をひもとく必要性を感じるようになった。

書道史といってもその全貌をつまびらかにしてはとても右卿論に辿り着くことは出来ない。そこで非才ながらも工夫を凝らして書道史の概要を示すことにした。書の道すがらを概観しつつ右卿の創始した“象書”の本質に迫りたいと思う。

なにしろ古法といい、象書といっても右卿論や書法論は断片的に書き継がれてきたに過ぎない。つまり、一冊の論考が世に出たことはない——古法なるものを提唱したのは右卿を以て嚆矢としているからに他ならない。古法とか象書はいわくいい難い内容が籠められているのである。

右卿の高弟・戸田提山は書道史の中にあって右卿の書業は近代性と古法と象書の3点から考えてみなくてはならないと述べている。そうであれば、尚更、近代以前の書とはどのようなものであるのかを識る必要がある。過去の書道史を通覧して今日の書流をみれば、現代書、少字数書による象書の意味内容がより適確に理解できるに違いない。

右卿は書道史の中で少字数書の象書を創始し、「書の世界性を求めた」作家であった。また書作において淡墨によるにじみ、超濃墨による盛り上がりとかすれの美を表現することを確立、認知流行させた。それは書の国際性ではなく、書の世界性——普遍性を希求したということでもあった。

そもそも、これまでの書の歴史を振り返ってみると、伝統そのものに主体を置き、伝統の形と心をそのまま受け継いでいくことが重要とされた。すなわち師承相伝の方法が一般的であった。そして流儀書道を生むに到るほど伝統性が重んじられ、ついには江戸時代のお家流などまで流行することになった。

これに対して右卿は古典を広く深く体験し、その真髄を洞察しようとしながらも伝統という巨大な流れに身を投ずることはなく、近代的自覚に立つ自我に主体を置き、逆に伝統を見直した書人であった。長く続いた伝統的多字数書を止揚して、一字あるいは二字の少字数書を以て新しい様式美を確立した——右卿を語る上でこのことの重要性は強調しすぎることはない。

1 節——右卿の故郷——

少字数書によって現代書の地平を切り拓いた手島右卿は1901年（明治34）11月3日、高知県安芸市に誕生した。本名を南海巍といい、その名は「南海に巍々として聳えよ」という父鷹太郎の願いが籠められている。

右卿の生まれ育った安芸市は高知市室戸岬に向かって約60km西方の地にある。高知県は南国土佐といって温暖な気候であるが、前には太平洋の荒海が打ち寄せ、後方には四国山地の山々が迫る。安芸川沿いには細長く狭い平野があり、「お城下」と呼ばれた高知市について栄えた土地柄であった。

安芸市の名称は戦国時代にこの地を治めた安芸氏に由来する。安芸城主・安芸国虎は16世紀に長宗我部元親によって滅亡し、浄貞寺で自刃している。長宗我部元親は土佐の諸豪族を滅ぼし土佐国司一条兼定を豊

後に追放し1575年、土佐国を統一した。その後も阿波、讃岐、伊予を攻略して1585年には四国全体を支配平定した。しかし同年、羽柴秀長の征討軍に敗れて降伏し、土佐一国のみの領有を許された。

1600年（慶長5）豊臣軍と徳川軍との天下分け目の関が原の戦いに東軍についた山内一豊は戦功を上げ、その功として土佐20万石を封ぜられ、長宗我部氏に代わって山内氏が土佐を治めた。安芸は山内氏の家老、五藤氏が代々治めてきた。山内氏に支配された長宗我部代々の人々は抵抗したが、山内氏の支配は揺るがず徳川260年の鎖国政策の中で、発展性はないが長く安定した社会が続いたのである。

安芸が再び歴史の表舞台に登場するのには幕末維新を待たねばない。「土佐のいごっそう」と呼ばれる不屈の精神は長い徳川時代を経ても失われることはなく、維新回天の大事業は、土佐の勤王の志士に負うところが大きであった。坂本龍馬、中岡慎太郎、武市瑞山などの土佐下級武士の活躍によって明治維新が遂行された。安芸からは中岡慎太郎や長岡道之助らが尊皇攘夷運動を展開した。道之助は武市瑞山の土佐勤王党に従って攘夷運動を進めた。瑞山が下獄すると瑞山救出を藩に要求したが、受け入れられず武装蜂起した。安芸地方の志士だけの騒起となり、捕らえられ同志23士とともに処刑された。

一方、中岡慎太郎は安芸郡北川郷の生まれで、はじめ高知に遊学しその後江戸に出て、ついで藩主山内豊信の命で北方各地を巡視する。1863年、京都の尊攘運動が弾圧されると脱藩して長州藩尊攘運動を指導し、坂本龍馬が海援隊を組織すると陸援隊を組織して隊長となる。以後討幕運動に活躍したが、大政奉還後に京都近江屋で龍馬と共に斬殺された。

大政奉還によって源頼朝以来700年に及ぶ武家政治は終焉し、西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允らの維新功臣による明治維新政府が実現、日本の近代国家が開始された。

明治時代に入ると土佐の片田舎でしかなかった安芸の地にも新しい文物が注入しはじめて活気が漲った。維新後、土佐で最も有名な人物といえば岩崎弥太郎であろう。弥太郎は土佐藩庁が商館開成館を開設したときその貸殖局下役となり、その後長崎勘定役に抜擢され、同館の出先機関であった土佐商会の実権者となった。1871年（明治4）廃藩置県のと き新たに藩船その他の財産の払い下げを受け大阪に三菱商会を設立し海運業を始めた。その後は半官半民の郵便蒸気船会社の持船を買い上げてこれを三菱に払い下げたり、船舶修理、航路開設の度に政府の補助を受け、三菱の海運業独占を確立した。1881年には三井資本と共同運輸会社を設立して政府の多大な保護を受け、今日の総合商社三菱の基礎を築いた。

安芸出身の著名人に昭和期の財政家浜口雄幸（1870—1931）がいる。雄幸は後藤新平の知遇を得て第三次桂内閣の通信次官となり、その後第二次大隈内閣で大蔵大臣となった。衆院議員に当選してからは財政通として時の内閣の放漫財政を批判した。1927年、民政党初代総裁に選ばれ、29年には田中義一内閣に代わって組閣した。その威厳ある特異な風貌と篤実な人柄からライオン首相と呼ばれたが、1931年東京駅で右翼青年に狙撃され重傷を負い、その傷が癒えぬうちに亡くなった。

右卿の父・手島鷹太郎（1870—1914）は、はじめ安芸町（現安芸市）にできた赤レンガの簡易裁判所に勤務したが、まもなく弁護士となり、裁判所から道一つ隔てた処に居を構えた。安芸には邊幅を飾らぬ温厚な人が多いが、その中に前述の岩崎弥太郎や浜口雄幸といった「いごっそう」が存在した。いごっそうとは、「異骨相」からきているとの説もあるが、とにかく特異な風貌で変わり者、いっぺんこう決めたらなかなか節を曲げない剛直者のことをいう。右卿の父、鷹太郎も稀代のいごっそうといわれた人で、大層な変わり者であったらしい。その逸話を紹介する。

——安芸の町に初めて電話が引かれると鷹太郎は負けてはいかと電話を引き込み、しかもその番号が1番であることに固執した。右卿が小学校へ入学すると純毛モヘヤの二十襟服に金ボタン、すそ細のズボンに革靴といういでたちで登校させ、教師や全校生徒を驚かせたという。

また鷹太郎がある人と口喧嘩をして、その人の子の成績が2学期終了時点で1番、そして右卿が2番であったという。これに腹を立てた鷹太郎は右卿を納屋に2日間閉じ込め反省させたという。負けず嫌いというより変人としかしいようがない。

尚、手島家の長男は右卿であるが次男の慕真は本家筋の高松家を継いで高松慕真となり、三男の不乗は母

方の南家が廃家となるので南家の養子となり、南不乗となった。三兄弟は皆手島鷹太郎の実子であるが、姓が違う理由はそのためである。

2 節——書との出会い——

安芸はもともと大和絵が盛んな地方であったが、国見秀石、益田石華らの書活動によって書も盛んとなった。「安芸は字どころ」といわれるほどになり、川谷横雲・尚亭兄弟、樋口双翠などの能書家を輩出した。少年右卿の家には父の書斎にいつも筆と墨と紙といった文房四宝が置かれてあったので、右卿は父のいないときに筆を借りて街で見かけた珍しい隷書体の文字などをまねて書いたりしていた。小学生に入学すると絵と書を始めたが、最初は絵に力が入ったという。絵は須藤某という安芸の絵描きについて水彩から油絵の手ほどきを受けたが、特に絵金の芝居絵に惹かれたようで、武者絵などを好んで描いていた。

1907年（明治40）に山内豊景を総裁に乾南陽、島内松南、山内米華、本山白雲、石川寅治などによって土陽美術会高知支部がつくられた。少年期、右卿が書や絵に傾斜したのはこのような土壌、背景があったからであろう。

右卿は利かん気の子であったが、字もうまいし絵もうまいということで街の神童のようにいう人もあり、それは父鷹太郎の密かな自慢でもあったろう。

右卿は次のように述懐している。「子供のときから字を書くことは好きであったが、それよりも字の形が好きであった。字の形が人間の顔に見えて何ともいえない魅力を感じた。父が法律事務所をやっていたから墨はいつも磨ってある。書生が書き損ねた罫紙にいたずら書きをするのを覚えたのが最初でしょう」——南風対談（高知新聞社）

筆者は字の形が人の顔に見えたというところに注目したい。右卿の絵画的な視覚は幼少のころより芽生えていたのである。後述するが右卿の創始した「象書」とは一字あるいは二字の少字数を以て字の意味を象として表すことであるが、それは同時に文字の意味内容の判らない人々をして一種のアートとして視覚に訴えることができる。右卿は街中の看板や珍しい字が一種のアートに見えたのであろう。

明治の後半、東京に近藤雪竹という隷書の能書家がいて、雪竹流といって全国に多くの門人をもっていた。この雪竹の隷書を見た右卿はその美しい造形性に魅せられたという。また安芸の妙山寺には前田黙堂という住職がいてこの人も隷書を書いていた。右卿が妙山寺に行くと、寺のお墓には隷書体の文字が多数あったが、それは益田石華の筆によるものであった。右卿は紙と鉛筆でその墓の隷書を拓本のように写し取っては家に帰って手本にしたそうである。余程書の好きな少年でなくてはできないことだろう。

この頃高知では一字書のコンクールを月例募集していた。日刊新聞社が主催するコンクールは半紙に一字の大字を書いて無記名で提出し、益田石華、川谷尚亭、樋口双翠などの審査員の合計点で順位が決定する。小学校6年の右卿は50人ほどの大人に交じっての参加であった。川谷尚亭などが右卿に1等賞をつけたこともあって「この子は字でも神童じゃ」という評判が立った。この受賞で少年右卿が川谷尚亭を好きになったのはいうまでもない。厳父も右卿の書の才能に注目し、日下部鳴鶴の三體千字文や長峰快剣の筆を買い与えた。しかし鷹太郎は右卿には軍人になることを願っていた。

川谷尚亭は上海の東亜同文書院に在学中、体調を崩し北川村へ帰郷し、兄の横雲のすすめで近藤雪竹に師事して書を始めた。24歳のときである。尚亭は左利きであったためそれを克服するために毎日5升（約9リットル）の墨汁で字を書いたという伝説がある。

旧制中学（現安芸高校）に入ると右卿は、田内千秋という絵の先生についてデッサンを学んだ。しかし父鷹太郎は軍人になれ、といって勉学を薦めた。当時のステータスはまず軍人、次に政治家、経営者という順番であった。それ故、絵描きは道楽家のすることとされていた。

中学2年になった右卿は、書家川谷尚亭の門下に入り、鶴翁千字文の三体を学び終え、同時に絵画にも熱を入れた。この絵と書の修練が後の右卿の書に絵画的造形性を付与したことは想像に難くない。

1914年（大正4）の晩秋、厳父鷹太郎は破傷風に患かり、12月8日、45歳で他界した。右卿は14歳で家督を相続したが一家6人の生活をみることなどできる筈もない。法律家であった父が健在であった時の安定した生活は一変し、遺された僅かばかりの財産を一度に失うことのないように、二男の慕真は親戚の家に預けられ、右卿が中学校を出ると家族は一旦四散するというやむを得ぬ状態となったのである。

3 節 ——放浪の青年期——

安芸中学のとき川谷尚亭に師事した右卿は、三體千字文を2年で終了し、次に鄭道昭と書譜を習い、さらに張遷碑の隷書に取り組んだ。しかし父鷹太郎を亡くして状況は一変し、中学を卒業すると右卿は一人で生きていかなくてはならなかった。そんなとき師の川谷尚亭は北川村の小学校教員から高知の土佐高等女学校へ転勤し、さらに翌年の1918年（大正7）には上京して三菱造船へ転勤が決まった。

右卿は町の看板や映画館の看板などを書いて生活の足しにしていたが、尚亭が上京することによって熱中していた書の志も冷めた。再び絵画で立とうとデッサンや写生に打ち込んだが、生活はますます困窮の度を増すばかりであった。右卿はこの頃から酒の味を覚え憂さ晴らしをするようになったという。

町での看板書きのアルバイトが少なくなると仕事を辞め、高知市へ出たり大阪方面に行ったりして糊口をしのいだ。二男の慕真も中学を卒業すると、兄にならって大阪まで足を延ばしてアルバイトをしていた。しかし、世の中の矛盾を肌で感じたのか、彼の思想は次第にアナーキーに傾斜し始め、反権力の政治運動に手を染めるようになっていった。

三男の不乗は右卿と13歳も年が離れており、母孝と一緒に暮らしていたが、生活苦はその足元までひたひたと迫っていた。三男の不乗は生活力の旺盛な少年で、小学生の頃から映画館の看板を描いたりして自分で生きていくことを覚悟していた。

後年、この三兄弟はそろって書の道に参入し、中央書壇を揺るがすような存在になっていくのだが、この頃は日々の生活に追われる毎日でもとも将来の展望など開けそうにもなかった。

右卿は五人兄弟の長子としての責任から親代わりで面倒をみる立場にあった。しかし、所詮名もない貧乏画家であってみれば安芸での仕事にも限りがあり、西日本への放浪の旅に出たのであった。この旅では食物を口にできない日々が何日も続き右卿は呻吟した。そしてついに遠縁を頼って台湾へ渡ることを決意したのは1920年（大正9）のことであった。

金木家は、台湾の高雄では精糖工場など手広く事業をしていた。右卿のそこでの仕事は1年ばかり続き当時のことを「台湾での明るい風光は頻りと画心を駆り立て本物の洋画が描けたような気がした」——現代書道教室（筑摩書房）と述懐している。

しかし高雄で悪性のマラリアに罹り、命からがら安芸へ帰郷したのである。安芸では芸陽美術界なるものを仲間と興して展覧会を開いたり、慕真や不乗と共にレコードコンサートを催したりしてその日暮らしの日々が続いた。

1923年（大正12）になると関東大震災が起きて東京は大きな被害に見舞われた。川谷尚亭はこの震災を機に東京での務めを辞めて大阪に転居し、「甲子書道会」を設立。近代書道に名高い月刊「書之研究」を発刊した。書道研究は古典学書の方法論と新世代の書人を鼓舞する論説によって伊藤東海、田中塊堂、炭山南木ら川谷尚亭門のみならず、遠く北海道の金子鷗亭、桑原翠邦ら有為の青年書家に影響を与えた。

川谷尚亭が大阪でプロの書家として甲子書道会を興すと、右卿・高松慕真・山崎大抱ら高知の門下生は早速大阪に向いて尚亭の教えを乞うた。そして地元の安芸にも支部を結成し、書の研鑽に取り組むこととなった。

1926年（大正15）夏には尚亭が安芸に一時帰郷したのを機に右卿・不乗・大抱は再び大阪へ出た。尚亭は「書の研究に打ち込むのはよいが、人間は食べなくてはいいけん」と言って、右卿と大抱は茨木の役所に勤めた。しかし右卿は肌に合わんと言ってすぐに辞め、肖像画などを描いて糊口をしのいでいた。

こうして書と絵の両方を生業として時を過ごすうちに短い大正時代が終わり、昭和の時代が到来した。1928年（昭和3）の初めに帰郷した右卿は、27歳になっていた。この年、当時土佐女学校教員をしていた川島栞と結婚し放浪生活に終止符を打った。地元の野村自動車会長野村茂久馬の厚遇を得て、同社の嘱託となった。あまつさえ野村会長は土佐書道協会を設立して右卿を理事長に任命し、その書活動を後援した。

その年は右卿にとって幸運が続いた。京都で裕仁天皇御即位の御大典が行われるにあたり、一条実隆公爵が天皇・皇后両陛下を謹写して皇族・華族方に頒布することになった。そのための画家5人を公募したが右卿はその中の一人に選ばれ、20点余の御肖像画を謹写した。その御肖像画は後年川谷尚亭の蔵の中の桐箱の中から見つかった。その後安芸市田野町の清岡家にも保管されているのが分かり、手島家に返された。右卿は武者絵や空海像などを何枚も描き、それらは個人の家ばかりでなく、神社や仏閣にも納められた。放浪の旅から帰った右卿は、ようやく一人前の画家兼書家として認知されていったのである。

【参考文献】

1939 書勢（書学院）

1971 現代書道教室（筑摩書房）

1984 南風対談（高知新聞社）

2001 墨 1 5 0 号（芸術新聞社）

2001 手島右卿展図録（独立書人団）

〔註：“書人右卿の軌跡”は今回より3回にわたって連載いたします〕 一光記念館

画家の生きざまを紹介する展示として 「横山大観とその時代展～日本画に新しい視野を開いて～」 を開催して

河西珠実

光記念館 学芸員

光記念館では平成16年2月26日（木）から5月16日（日）までの間、開館5周年記念特別展として、館所蔵品のみで『横山大観とその時代展 ～日本画に新しい視野を開いて～』を開催した。

開催のコンセプト

日本美術の巨匠横山大観は、明治維新の年に生まれ、90歳で他界するまで60年以上にわたって精力的に制作や社会活動を行い、美術界のみならず社会・文化に大きな影響を与えた。本企画展は、東洋と西洋の融合をめざして芸術界に旋風を巻き起こした大観の、日本画の近代化と日本の絵画史上に果たした役割を今日の視点から検証することを目的として開催した。

また、そのほか以下の観点から当館独自の展示を行い、作品のみでなく、大観の人間としての魅力を最大限紹介することをねらいとした。

●館所蔵品のみで大観の魅力をいかに味わって頂くか

当館では横山大観の作品を13点所蔵しているが、大作が乏しく、重要美術品も含まれていないため、それだけで大観展を行うには質・量的に無理があった。しかし、大観と縁りの画家（東京美術学校で大観に関わった画家や日本美術院の同人ら）の作品を合わせると数十点のコレクションになる。大観と周辺画家たちとの関係を探ると、そこには様々なエピソードがあり、そうした逸話自体が大変興味深く、大観を紹介する上で必要不可欠なものと判断した。

そこで『横山大観とその時代展』と称し、大観と周辺画家の作品を展示するとともに、解説パネルの中にエピソードなどをふんだんに盛り込むことにした。

●タイムリーな開催時期

2004（平成16）年は、横山大観が師 岡倉天心に同行して菱田春草と共にインド、アメリカ、ヨーロッパを回り、各地で展覧会を開いた年―1904（明治37）年―から数えてちょうど100年目にあたる。大観が師 岡倉天心から「空気を描く方法はないか」と言われて生み出した手法は、日本画壇からは“朦朧体”（ぼやけて薄気味悪い）と嘲笑され、全く認められなかったが、海外では高い評価を受け、高値で買い上げられたという。それを知る人は今、ほとんどいない。100年目という節年にあたり、高山市民をはじめ広く多くの方に、こうした歴史的事実を知って頂くよう努めた。

●地域性を活かした、高山ならではの観覧

大観は、1900（明治33）年5月に岐阜市で開催された日本美術院巡回展覧会の帰り、下村観山、菱田春草、木村武山らと連れ立って、国宝美術（当時は特別保護建造物）である国分寺見学を目的に高山に立ち寄っている。また、帰国した年（明治38）にも高山を訪れ、一ヶ月ほど滞在して国分寺で絵を描いた。本企画展では、このとき大観が城山（臥牛山）を描いた貴重な作品『臥牛山秋景図』（個人蔵）を高山市民から借用し、公開させて頂くことにした。

また、こうした大観と高山との接点を紹介することにより、高山ならではの作品、地域性を活かした内容の展示を試みた。

解説パネルの作成において心掛けたポイント

本企画展では、作品の解説よりもむしろ下記の点に重きを置いた解説パネルを作成した。

●画家の人柄や生きざまを芸術として紹介する

横山大観という人物は、追求していけばいく程興味深く、自身の生き方そのものが芸術であると言える。そこで、大観の人柄や生きざまなどを是非とも記載したいと考え、芸術として紹介した。

- ・米さえ底を突くような苦しい生活の中で、世界に誇れる新しい日本画の創造に全精力を傾けた情熱と気迫。
- ・愛情を持って育ててくれた恩師 岡倉天心や橋本雅邦を慕い、その教育に応えようとする恩情。
- ・岡倉天心を排斥しようとする東京美術学校の動きに抗議して連袂辞職をする熱血漢と師への忠誠。
- ・親友であった菱田春草の死を悼み、追悼展を開催して遺作の売上金を遺族の生活に当てがった友情。
- ・文展の審査員として「賞は人でなく、現在の作品に対して与えるべきもの」と主張し、入賞作品を覆した不屈の精神。

尚、画家の人柄や生きざまはその人の発言によく表れるため、大観をはじめ、周辺画家たちの名言（語録）をパネルで表示した。

●画家が生きた時代の時代背景や歴史的事実を物語り風に紹介する

- ・東京美術学校の開校と、第一期生として入学した大観。
- ・アーネスト・フェノロサや岡倉天心、橋本雅邦等による新しい日本画創造のための教育。
- ・岡倉天心の東京美術学校校長排斥事件と日本美術院の創設。
- ・朦朧体の不評による日本美術院の経営破綻と五浦への移転。
- ・岡倉天心の死と再興日本美術院の創設。

こうした社会や画壇の動きを分かりやすく紹介するため、また、画家をイメージしやすいように写真なども盛り込んで、“読みやすい解説”“見やすいグラフィック”を作成した。

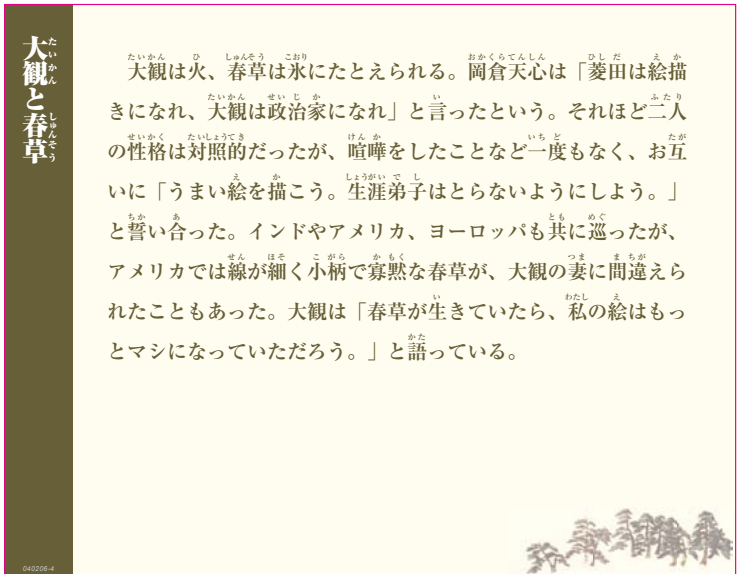
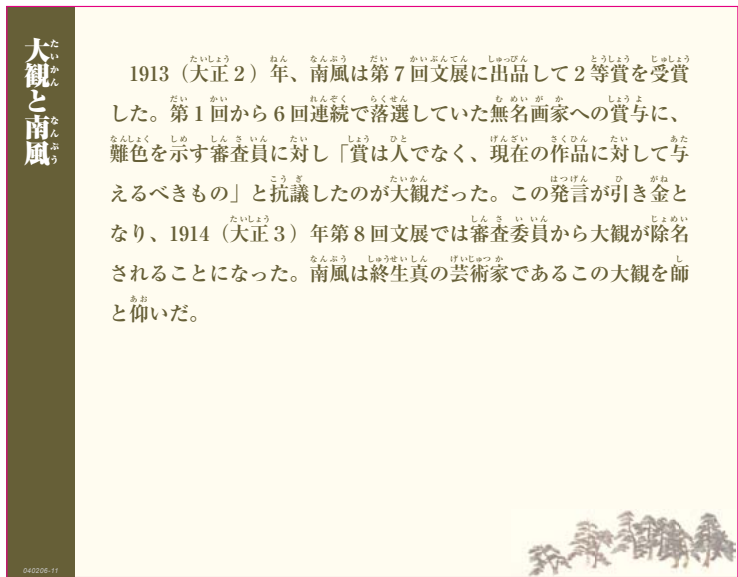
〔掲載した写真〕

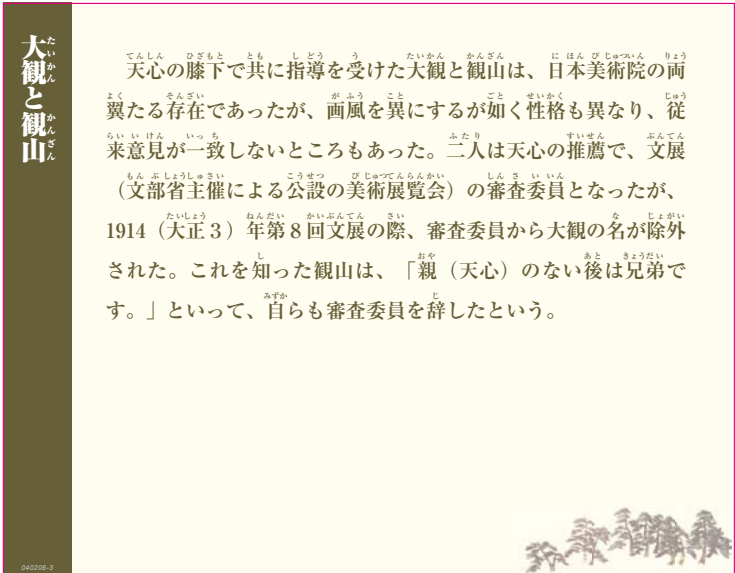
- ・大観、フェノロサ、天心、雅邦、観山、春草、武山等の肖像写真
- ・東京美術学校の卒業写真
- ・日本美術院の正員たちの集合写真
- ・再興日本美術院の同人たちの集合写真
- ・茨城県・五浦の風景

結果として

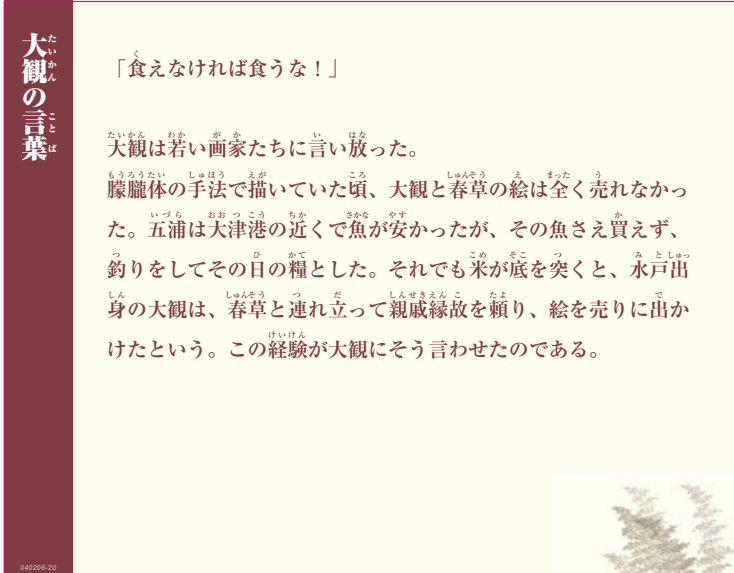
見学されているお客様の多くが展示ケースに張り付くようにして、ケース内の解説パネルに読み入っていた。語録などをしきりに筆記している方も多く、これまでの企画展で、また美術の作品展では初めて目にする光景であった。映画『ラスト・サムライ』のヒットにより、大和魂が見直されている時期でもあり、来館者が明治の画家達の精神や気概に対し、敏感に反応されたように思う。

一人の画家の作品展であれば、その画家の代表作や質の良い作品を取り揃えるに越したことはなく、良い作品はそれだけで感動も呼ぶものではあるが、一画家の生きざまや人柄などを詳しく紹介することで、画家がより身近な存在に感じられ、作品に対する見方や感じ方が変わることがある。また、美術品を歴史展示風に見せることも時に新鮮である。芸術の大家の中には波瀾万丈な人生を送る方も多く、その人の歩みと作品を照らし合わせて鑑賞すると、制作時期の出来事が作風に影響を与えていることが見て取れるなど、面白いものである。お客様より、「これまで横山大観の名前や作品の幾つかは知っていても、大観という画家の人となりをここまで知る機会はなかったので、とてもよかった。」「茨城県民でありながら五浦と大観の関わりを知らず、今回知り得て感動した。」などの感想が聞けたのは幸いである。





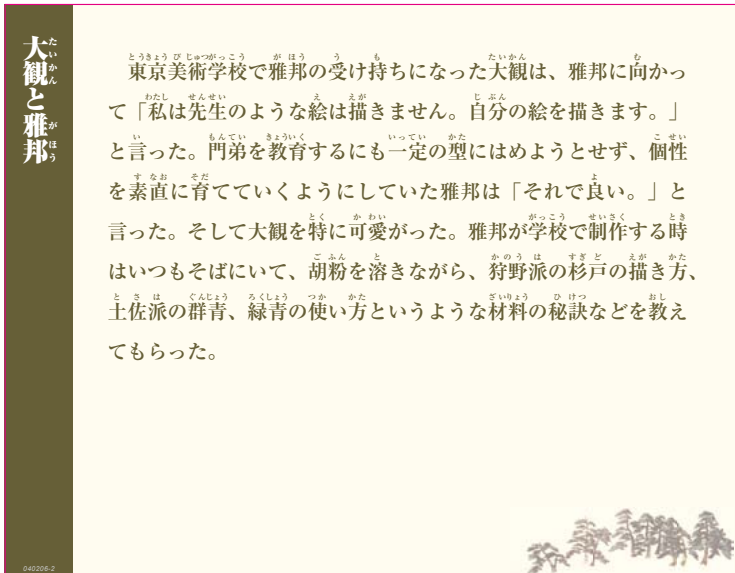
天心の膝下で共に指導を受けた大観と観山は、日本美術院の両翼たる存在であったが、画風を異にするが如く性格も異なり、従来意見が一致しないところもあった。二人は天心の推薦で、文展（文部省主催による公設の美術展覧会）の審査委員となったが、1914（大正3）年第8回文展の際、審査委員から大観の名が除外された。これを知った観山は、「親（天心）のいない後は兄弟です。」といて、自らも審査委員を辞したという。



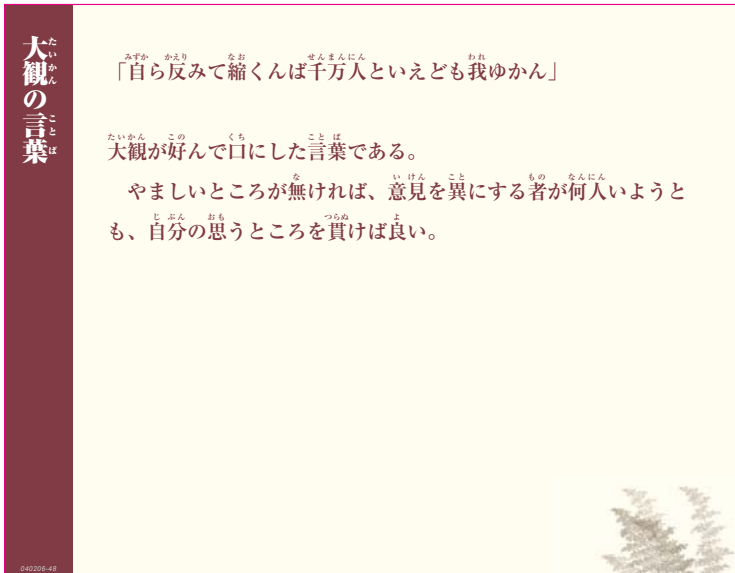
「食えなければ食うな！」

大観は若い画家たちに言い放った。

朦朧体の手法で描いていた頃、大観と春草の絵は全く売れなかった。五浦は天津港の近くで魚が安かったが、その魚さえ買えず、釣りをしてその日の糧とした。それでも米が底を突くと、水戸出身の大観は、春草と連れ立って親戚縁故を頼り、絵を売りに出かけたという。この経験が大観にそう言わせたのである。



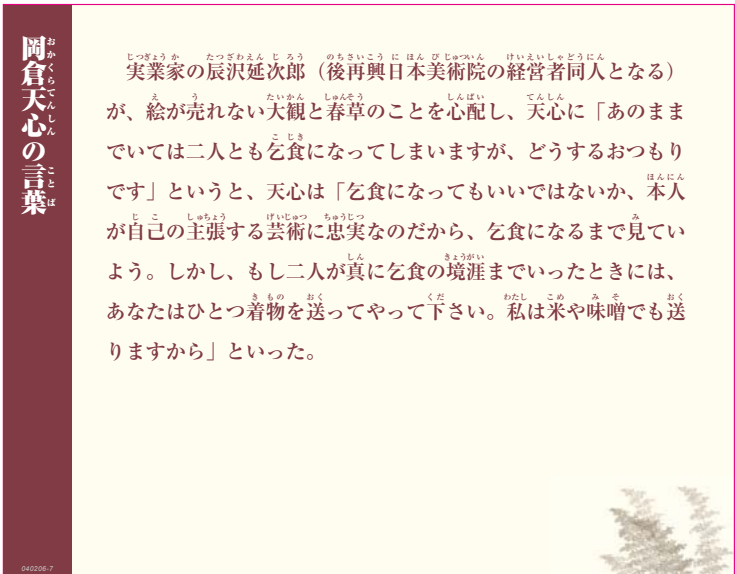
東京美術学校で雅邦の受け持ちになった大観は、雅邦に向かって「私は先生のような絵は描きません。自分の絵を描きます。」と言った。門弟を教育するにも一定の型にはめようとせず、個性を素直に育てていくようにしていた雅邦は「それで良い。」と言った。そして大観を特に可愛がった。雅邦が学校で制作する時はいつもそばにいて、胡粉を溶きながら、狩野派の杉戸の描き方、土佐派の群青、緑青の使い方というような材料の秘訣などを教えてもらった。



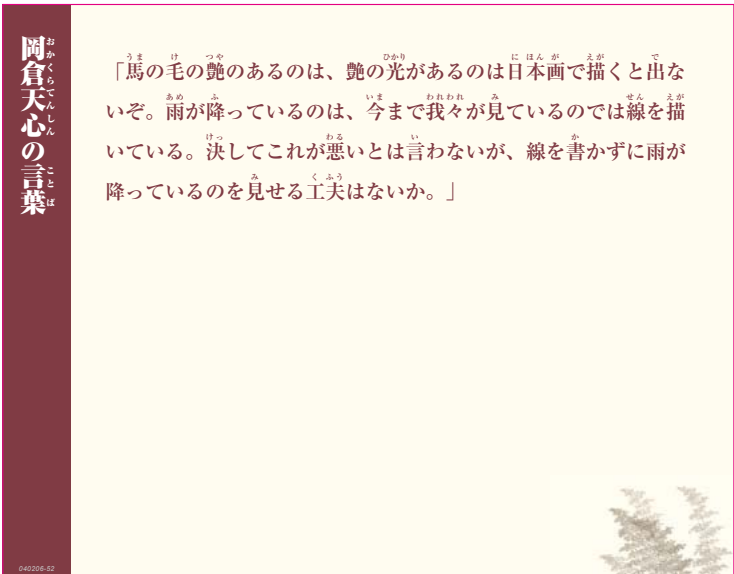
「自ら反みて縮くんば千万人といえども我ゆかん」

大観が好んで口にした言葉である。

やましいところが無ければ、意見を異にする者が何人いようとも、自分の思うところを貫けば良い。



実業家の辰沢延次郎（後再興日本美術院の経営者同人となる）が、絵が売れない大観と春草のことを心配し、天心に「あのままでいては二人とも乞食になってしまいますが、どうするおつもりです」というと、天心は「乞食になってもいいではないか、本人が自己の主張する芸術に忠実なのだから、乞食になるまで見ていよう。しかし、もし二人が真に乞食の境涯までいったときには、あなたはひとつ着物を送ってやって下さい。私は米や味噌でも送りますから」といった。



「馬の毛の艶のあるのは、艶の光があるのは日本画で描くと出ないぞ。雨が降っているのは、今まで我々が見ているのでは線を描いている。決してこれが悪いとは言わないが、線を書かずに雨が降っているのを見せる工夫はないか。」



古代文明展の試み「インカ文明展～古代アンデスの秘宝～」

松本庸子

光記念館 学芸員

1. はじめに

インカ帝国は南アメリカ大陸を南北8000kmに渡って縦断する世界最長のアンデス山脈のある地域に15世紀頃出現し、16世紀初頭には日本の約8倍の領土を誇る大帝國に発展している。黄金の神殿や黄金の庭など輝かしい帝國の様子がスペイン人の記録からも伺える。しかし、インカ文化は約100年ほどしか続いている。インカ以前のプレインカと総称される様々な諸文化が、東の海岸砂漠地域から6000m級のアンデス山脈、西のアマゾンにまで広がってアンデス原産の食材を豊かにし、アンデスの多彩な環境を享受しながら4000年間、栄枯盛衰を繰り返している。

紀元前には、ペルー北部を中心にジャガー信仰を行なったクビスニケ文化・チャビン文化が興った。紀元後には北部で抽象的な土器や象嵌を施した黄金製品で知られるモチェ文化、南部には地上絵や多彩色の土器で知られるナスカ文化や織物の美しいパラカス文化、ボリビアの方では石造建築やチチャ（トウモロコシの酒）を飲むケーロが多く見られるティワナク文化が繁栄している。10世紀以降はインカ帝國にも直接影響を与えたと考えられるワリ帝國やチムー文化・シカン文化・チャンカイ文化など様々な特徴を持つ文化が繁栄している。文字も大型家畜も持たないアンデスの人々は紀元前2000年頃から神殿建築を行ない、黄金製品や土器・石製品・織物などを伴う豊かな文化を培った。

「インカ文明展」では、最新の学術成果を踏まえ、悠久の歴史と多彩な環境の中で培われたアンデスの諸文化について、光記念館所蔵のユニークな形の土器や木製品・色鮮やかな織物・黄金製品などを約140点紹介する。そして、東京大学総合博物館よりクントウル・ワシ遺跡の黄金製品レプリカ8点、比較の意味で高山市から出土した縄文時代の石器（国と県の重要文化財）、ペルー大使館より「カバック・ニャン～偉大なインカ道～写真パネル展」のパネル40枚を借用し、同時に展示した。

2. 展示の一般的な傾向

古代文明の展示は一般的にもよく行なわれているが、文明展示の一般的な特徴は美術品的な象徴展示が最も多い。そして、ワークショップや資料解説機器などで紹介を補う事が多い。解明されていない部分も多いためか、資料の解説はあるが、その文明の特徴や背景、全体像がわかりにくい展示が多いと感じていた。実際、今回の展示を通して数千年の歴史を持つアンデスの多様な歴史・文化を紹介することは、かなり困難だった。特にアンデス文明と総称されるこの文明には、インカ帝國のようにわずか100年足らずで広大な範囲にまで広がり帝國と呼ばれる繁栄を遂げた文化もあれば、千年近くも一定の地域で栄えた文化もある。展示を少し見る程度で多種多様な文化を総合的に理解することは不可能と思えた。

また、一般的に知られていない文化の展示は興味を持たない人の方が多いようだ。エジプト文明などメジャーな古代文明は素人でも興味のない人でも多少は見聞きしているのですぐ興味を示してもらえるが、インカ文明ならともかくプレインカのあまり知られていない文化を紹介しても、理解することに拒否反応をおこす人もいる。

やはり来館者に喜ばれるのは、インカ文明なら黄金製品やマチュピチュ遺跡など、学校やメディアなどで頻繁に紹介されているものであろう。



横山大観「乾坤耀く」



横山大観「海浜」



菱田春草「瀑布」

3. 光記念館の古代文明展示の試み

光記念館ではアンデスの特徴的な土器や木製品・金属製品・多彩な手法の織り物を約200点所蔵している。資料やグラフィック、造作、体験学習を有効に活用して、アンデスの多彩な歴史を分かりやすく紹介したいと考えた。監修者としてアンデス考古学の第一人者・東京大学名誉教授・大貫良夫先生にご協力を頂き、今回はペルー・ボリビア大使館や高山市教育委員会にもご協力・ご助言を頂きながら、より文化交流の深まる展示をめざすことにした。

まず、展示室外に大型の風景写真、導入部にナスカの地上絵のライトやメインの黄金製品（レプリカ）などを配置し、来館者に興味を持ってもらえるように心掛けた。〔写真1〕

展示は様々な視点で比較を行なうことにした。インカとプレインカの文化の違いや共通点を見るのをはじめ、世界各地の古代文明（メソポタミア・エジプト・ギリシャ・中国）や日本の縄文資料や飛騨地域の山岳文化とも比較を行ない、来館者の興味・関心を引き出せるよう工夫した。〔写真2〕

そして、諸文化ごとの紹介や資料の解説のみに終わらないよう、各展示資料の近くに触れる体験グッズを用意して参加体験を促した。〔写真3〕

展示内容を具体的に上げると、アンデスの多様な文化や地形が総合的に理解できるような文化年表や地形図を作成した。特にホライズンと呼ばれる5つの文化時期を示し、同時に世界地図でその時期の日本や世界にどんな文化が興っていたかを示した。〔写真4〕こうした比較は理解を深め、大変好評を得る事が出来た。

続いて普遍的に作られた神殿・神像・黄金製品の紹介。神殿や神像は世界各地の古代文明のものとも比較した。特に金製品は興味深く、B.C.1500頃のクピスニケ文化、A.D.500頃のモチェ文化、A.D.1400頃のチムー文化のものを紹介し、2000年近く作り続けられたアンデスの金製品とその特徴を紹介している。

また、アンデス原産の食品の多様さや世界への影響力、インカ文明の基層となったティワナク文化やワリ文化、現在のクスコに残るインカの名残やスペインの影響により変化した所など、インカをキーワードにその前後の文化に触れ、文化の背景となっ



〔入口〕



〔写真1〕導入部



〔写真2〕飛騨とアンデスグラフィック



〔写真3〕アンデスの楽器



〔写真4〕アンデス文化年表

た環境やつながり、特徴が総合的に理解できるよう努力した。

尚、現在に受け継がれるインカの祭りや文化、スペインによる征服後の影響や日本の飛騨高山における山岳文化との比較として、朝市や食材、世界遺産となっている合掌造りや縄文石器、絞り染めや羽織などとの比較を行ない、より理解を深められるよう工夫した。飛騨地域の文化とは意外な共通点も多く、地元の方々も興味深く見て行かれた。

来館者のターゲットを親子連れの特に子供とし、子供にも理解できるようグラフィックに写真・イラスト・図を多く取り入れた。そして今回特に力を入れたのは、各展示の近くに参加体験スペースを多く設けたことだった。現地で入手したお土産品も有効に活用できた。例えば「触れてみようコーナー」ではレプリカ土器やアンデス原産の食品、祭りや儀式に使われる楽器、キープ（インカ時代に使われた記録用の紐）、オンダ(投石紐)などに触られるようにした。この他南米地図・リヤマ・黄金製品・12角の石など様々な形のパズルや、黄金の部屋〔写真5〕、マチュピチュ（リヤマと民族衣装付き）などの写真撮影コーナーを設けた〔写真6〕。写真コーナーは一番人気が高く、来館者は様々な衣装を身に着けて記念写真を撮っていた。五感を使って学べるように心がけたが、疑似体験になったようで大変喜ばれた。

また、土・日・祝日の体験学習では“金属アクセサリー作り”（1回100円）や“金粉で砂絵を描こう”（無料）を行い〔写真7〕、あまり時間のない方にもにも手軽に楽しんでもらえるよう、スタンプラリーを常時設置しておいた〔写真8〕。

4. 展示期間を終えて

展示を行う際、展示資料の特徴をより理解できるように心掛けたり、文明全体への理解を深めるために、館員スタッフが様々なアイデアを結集してイラストやスタンプ、ライト、ぬいぐるみなどあらゆる物を手作りした。それによって館の独自性も十二分に発揮され、コストもかなり削減されたと思われる。多くの手が加わる事でより良い展示が行える事を痛感した。

今回の展示は来館者が親子共々楽しめ、各国の文化の理解と交流を深めることを目的として開催した。今後も光記念館としては、美術的に美しく見せる展示も大切と思うが、文明や文化の特徴をより深く理解し、楽しく学べるよう参加体験を重視した総合的な展示を心掛けたいと思う。一つ心残りなのは、インカ・プレインカの人々の精神世界を強く打ち出すのは今回の展示では難しかったことだ。今後も古代の資料から多くを学び、現代を生きる人々の精神世界・心の豊かさを育む場を提供する事を目的とし、広く一般に公開していきたい。

インカ文明展～古代アンデスの秘宝～

開催期間：2005年7月1日～12月11日

来館者数：21,464名

スタンプラリー利用部数：6082部



【写真5】体験学習：黄金の部屋



【写真6】体験学習：アンデスの衣装



【写真7】体験学習：金粉砂絵と金属アクセサリー



【写真8】スタンプラリー

エクアドル中部高地トゥンカワン土器について

十字星文様三色開口鉢 (資料1)、幾何学文様三色開口鉢 (資料2)、
 圏円十字文様三色開口鉢 (資料3)

長谷川悦夫

資料1-3は、共通する器形と表面調整、装飾技法から、一括遺物であろうと推測される。器形は高台付きの開口鉢である。土器表面は研磨され、光沢があるが、削り痕(整形痕)が完全に平坦化されておらず、多少の凹凸が見られる。3点とも全て「ネガティブ技法」により装飾が施されている。この技法は、「ロウ抜き」と同様、液体をはじく何らかの物質を用いて土器表面に文様を描き、その上から全体的に顔料を塗布することにより、焼成されたときに素地の色が文様として残るものである。

資料1は、口径20cm、底径7.2cm、高さ8.7cm。淡黄褐色の胎土の上に、黄褐色のスリップ(化粧土)を施し、さらに内表面には赤の顔料で施文がなされている。その上から黒の顔料が塗られ、黄褐色と赤色の部分がネガティブ文様として浮き出ている。内表面は、赤色の十字形の星文様で4つの文様帯に分けられており、各文様帯は、さらにネガティブ文の線により囲われている。一方の文様帯には方形、さらにその方形の中に階段文様がネガティブ文で描かれる。他方の文様帯には、底部の中心から口縁に向かって伸びる先細りの太線、口縁に沿って並ぶ点がネガティブ文で描かれる。外表面にもネガティブ文様が見られる。摩耗している部分もあるが水平方向に一周する線と、そこから垂直方向に伸びる3本の平行線がネガティブ文で引かれている。

資料2は、口径18.8cm、底径7.8cm、高さ9.8cm。資料1と同様に、黄褐色のスリップの上から赤で施文がなされ、黒の顔料がかからない部分がネガティブ文様として浮き出している。赤と黒の顔料が重なって見える部分もあることから、いったん焼成によりネガティブ文様をつけた上で、改めて赤で彩色を行ったのかもしれない。内表面は大まかに3つの文様帯に区切られている。まず中央を横断する文様帯に細長い三角形などが描かれて赤で彩色される。残り2つの文様帯は、黄褐色ネガティブ文の線によって囲われ、その中に直線、階段文様、圏点文がやはりネガティブ文様として描かれている。口縁に沿った細い帯の部分もネガティブ文として残っている。外表面には、水平方向に一周する線と、そこから斜めに伸びる3本の平行線がネガティブ文で引かれている。2組ずつ向き合うように、4組の平行線が見られる。

資料3は、口径20.5cm、高さ8.8cm。資料1、資料2と全く同様な施文の技法が用いられている。内表面には、底部に赤色の円、それを囲うように水平方向にネガティブ文の直線が巡り、口縁直下の細い帯との間に装飾帯がある。装飾帯には小さな円に囲まれた十字文様が連なっている。外表面には、底部から口縁に向かって3本1組の平行線文様がネガティブ文で施されている。

これらの土器の器形と文様、施文技法の組み合わせは、考古学者ハシント・ヒホン・イ・カマーニョ (Jacinto Jijón y Caamaño)によって、エクアドル中部の高地でトゥンカワン(Tncahuán)と名づけられた土器の特徴を有している。エクアドル高地では、いまだ考古学調査が進展しておらず、年代に関する詳細は不明である。とはいえ、白(淡黄色)に赤の彩色でネガティブ文様を施した土器が、エクアドルの地方発展期(500BC-AD500)に広範に見られる。また、高台付きの開口鉢という器形もこの時期のエクアドル海岸地方の土器に現れる特徴である。ベティー・メッガースも、ネガティブ文様と器形から、トゥンカワン土器を地方発展期のものと位置づけている(Meggers 1966:111-112)。

エクアドルを含む中米地峡の南部と南米大陸北西部は、先スペイン期における新大陸の二大文明地帯であるメソアメリカ(Mesoamerica)と中央アンデス(Central Andes)に南北をはさまれ、「中間領域」(Intermediate Area)と呼ばれる。中間領域では、スペイン人の到来にいたるまで各地に小規模な多様な社会が営まれた。中間領域の各地では地域ごとに多様な土器型式が存在し、メソアメリカのオルメカ様式や中央アンデスの

アンデス最古の金製品発掘談

平成 17 年 7 月 10 日 13:30 ～ 15:00 記念講演会（於 企画展示室、参加者 45 名）

大貫良夫

東京大学名誉教授

1. はじめに

皆さんこんにちは。大貫でございます。今日はようこそインカ文明展においでくださいました。インカ文明展と題しておりますけれども、インカ帝国が栄えた土地というのは、いわゆるアンデス地帯、ペルー・ボリビアに跨る地域です。そこで発達した文明を全体としてはアンデス文明と呼びます。そのアンデス文明の一番最後の時代にインカ帝国が栄えてインカ文明を作った。その前には色々な文化の長い歴史があって、そして最後がインカ帝国。そのインカ帝国までに至る長い歴史を総称してアンデス文明といっています。今日はインカそのものよりも、そこまでに至る過程、どのような時代、また文化があったのかということを表示に即しながら解説したいと思います。

2. アンデスのはじまり

まず、こちらの地図と年表を見ていただきたいのですが、アンデスと言いますのは、先程も申しましたように、ペルーやボリビアに跨る地域です。地図の左側の海は太平洋ですね。太平洋を隔てて日本やアジアと対しているわけですが、アンデス地帯へ最初に人が住みつくのは、今から1万3000年とか1万2000年ぐらい前の話です。それまでに北アジアから北アメリカに人が入ってきて、やがて南へ南へと広がる形でアンデスに人がやってくる。ですから、元々はアジアから来た人ですからアジア人ですね。私たちと非常に近い。顔かたちとか体の特徴をみると非常に近いものがあります。

どのような文化を持っていたか知りませんが、いずれにせよ今から1万年以上前と言うことは、土器もないし、農業も知らないし、大体石槍を使って、北アメリカではマンモスなどを獲っていた。段々下に向かってくるにしたがって、マストドンや別の動物になってくる。動物を狩猟し、野生の植物を採って食べているというような生活です。ところが、住み着いているうちに氷河期が終わって、地球が暖かくなってきた。すると、マンモスやマストドン、もっと別の大動物、オオナマケモノあるいは北アメリカでいきますと馬ですとか大きな巨大バイソンですとか、そういう大動物がみんな死んでいってしまう。

そこで人間たちはどうしようかと考えた。新しい生活に変わらなければいけない。それで小さな動物、ウサギだとかシカだとか、その他色々な動物や鳥も獲る。それから、海の魚や貝を獲る。そういう風な生活に変わってくる。そういう中で、北アメリカの一部、メキシコ中米の一部、アンデスの一部、コロンビア周辺などあちこちで食べられる植物、野生の植物を利用していたのをうまく育てると良くなる、もっとたくさん食べられるようになる、あるいは実が大きくなる、たくさんなる、そういうことに気がつきまして、少しずつ少しずつ植物を栽培するようになる。そういう中で、開発されてきたのがトウモロコシやサツマイモ、キャッサバイモ、ジャガイモ、インゲンマメ、トウガラシ。そういった植物が開発されていきました。



チャビン様式といった広範囲に分布する土器様式は認められていない。また、スペイン人到来時にも、メソアメリカのアステカ王国や中央アンデスのインカ帝国のような広範な領土を持つ国家も存在せず、首長制社会や部族社会が点在したことが歴史資料によって報告されている。

そのような中で、地方発展期のエクアドルに見られるネガティブ文様の土器は、比較的分布範囲が広い土器様式として際立っている。かつては、この土器様式が、メソアメリカ南東部のウスルタン土器(Usultán)と関連するものではないかという説も提唱されていた。ウスルタン土器もまたネガティブ文様をその特徴としており、年代はメソアメリカ先古典期後期(400BC-AD300)で、エクアドル地方発展期と一部並行している。また、ペルー北高地の中央アンデス地方発展期のレクワイ(Recuay)文化の白地ネガティブ文様土器と、トゥンカワン土器をはじめとしたエクアドルのネガティブ文様土器の類似も指摘されている(Willey 1971:296)。レクワイの年代は200BC-AD600、典型的なネガティブ文様土器の年代はAD1-500とされている(Smith 1987)。

上に述べた状況から、かつてはネガティブ文様の土器が、メソアメリカー中間領域ーアンデス、つまり中央アメリカと南アメリカを結ぶ交流の証拠として提示されていた。現在では、このような伝播論的な見方は痛烈な批判を受けてはいるものの、直接的な人やモノの往来の可能性は別にしても、各地の社会を次々と通って土器装飾技法など工芸品の製作技術に関するアイデアが広まった間接的な伝播の可能性については、いまだ検討を要するであろう。

本稿で紹介したようなトゥンカワン土器が出土するエクアドル高地の埋葬からは、銅製の小型装飾品も見つかっている。また、盆地の丘陵部の小規模遺跡が発掘されており、地方発展期の年代を持つトウモロコシの遺存体も出土している。このことから、トゥンカワン土器を製作した人々は、エクアドル高地の盆地丘陵部に小村落を営んでいたトウモロコシ農耕民であり、海岸地方の社会とも交流をもち、交易によってか、自ら製作したかは別にして金属器の利用も行っていたことが分かる。とはいえ、エクアドルをはじめとした中間領域では、メソアメリカや中央アンデスに比べて考古学研究が少なく、今後の調査によるデータの蓄積が待たれる。

参考文献

Meggers, Betty J.

1966 Ecuador. Ancient People and Places Series No.49. Frederick A. Praeger Publishers, New York.

Smith, John W.

1978 Recuay Culture: A Reconstruction Based on Artistic Motifs. Ph.D. Dissertation, University of Texas, Austin.

Willey, Gordon R.

1971 An introduction to American Archaeology. Vol.2 South America. Prentice-Hall, Englewood Cliffs, New Jersey.



資料1：十字星文科三色開口鉢



資料2：幾何学文科三色開口鉢



資料3：圏円十字文様三色開口鉢

栽培が始まって少し人が落ち着いて暮らせるようになる。すると定住生活、一ヶ所に集って人々が代々暮らししていくことが始まります。そして、人が増えていきます。やがて社会の仕組みも、今までは数家族が住んでいれば良かったのが、数十家族、百家族も住みますと、普通の状態ではなかなか社会がまとまらない。喧嘩も起きる。

3. 宗教と政治

宗教も発達します。どうしたら適当な時に雨を降らしてもらえるのだろう。神様にどうやってお願いしたらうまく雨が降ってくれるのだろう。それから芽が出て暫くしたら、多少なりとも太陽が照ってくれないと良い実りができません。そのためには、今度は雨をやめて、太陽が良く輝いてくださいというお祈りをしないといけない。だから、人が生まれて、育って、途中で病気になったり、あるいは健康でも年齢が来れば当然生涯を終えて死んでいく。人は一体、なんで、どうして死ぬんだろう。死んだ後どこへ行くんだろう、そういうことを色々考える。そうするとどうしても人間を超えた力、神秘の力、つまり神様の世界と交流しないといけない。人間の願いを届けて欲しい。聞いて欲しい。そのためには何か装置がないといけない。つまり、宗教の専門家、神様の世界までいける人、あるいは神様に近づくための建物、つまり神殿ですね。そういうものが大きな落ち着いた社会になるとできてくる。そのうちに色々な技術が入ってきまして、土器ができる、織物ができる、そのようなことをしているうちに神殿が大きくなって、その神殿はやがて金で飾られる、あるいは宗教の専門家、神官は金の冠を着けるとか耳飾りをつけるとか、そういう普通の人とは違う服装をしたりして神秘性を高めていきます。

平和な世の中だったのが、やがて違う社会どうしがぶつかり合って、戦争が起こってくるようになります。そうすると、今までの宗教の専門家によってまとまっていた社会がそれではまとまらなくなって、どうしても武器を持ったある特殊な一団ができてくる。それが政治を執っていく人を助ける。言うことを聞かない奴は言葉だけでは聞いてくれない。そういう場合に棍棒を持った人間たちを派遣して、あれをやっつけろ、処罰しろという形で、今で言う警察や軍隊といった制度が社会の秩序維持に必要なようになってくる。そういう社会、国家社会が出てきてしまう。それで、今度はいくつかの国家が平和共存していれば良かったのが、これまた国家間の争いということになりまして、今度は国家が別の国家を征服してその全体を1つの国家にまとめる。ということは、今までは一つの社会は一つの民族でできていた。同じ言葉をしゃべり習慣も同じ。ところが、違う国家が一つの国家の上にできますと文化も言葉も違うような人たちを下に支配するそういう国家形式、つまり帝国が発達する。やがて分裂する、またお互いに争い合う、そしてやがて一つになってまた分裂する。そういう形になって、最後の最後インカ帝国という大国家ができる。インカという王様がクスコという町を都にして、そこから道路網を築いて命令を出して全国を支配する。そして、軍隊を組織して、インカ道のあちこちに駐在させて、必要があればそこから軍隊を派遣する。“パックス・インカイカ”、インカの平和という意味ですが、落ち着いた状態が続きます。

それも大して長くは続かなくて、およそ100年、五代くらいの王様が代わったところで、運が悪くというか、世界中に飛び出していくスペイン人の歴史があったわけですが、丁度その歴史とぶつかって、スペイン人の一隊がペルーにやってきました、そしてそこにあったインカ帝国の黄金に魅了されて、全部自分のものにしたいということでインカ帝国征服に乗り出してきて、残念ながらインカ帝国は負けた。その時に技術の差というのが非常に大きくて、スペインは鉄砲を持っていて、火縄銃ですけれど鉄砲を持っている。それから、何と言っても鉄の槍とか鉄の剣を持っている。この切れ味が全然違う。それから、馬を何頭か持ってきて、馬を走らせることができる。そういうことで、アンデス地帯にはインカ帝国までは金属器というのは青銅の道具くらいしかなく、ほとんどは石と木で武器などを作っていた。ですから、鉄の剣の前にひとたりもない。そういうようなことがあった。

それから、実は帝国と言うのは、支配するものと支配されるものがありまして、インカと戦って敗れた人

たちがいるわけですが、そういう民族はインカが憎らしくてしょうがない。しかし、力では敵わないからじーっとしている。ハイハイと従っているのだけれど、そこにスペイン人が来て、どうもインカと戦ってくれるらしい。それならば、我々はスペインを応援して、あのインカ帝国の支配者たちを打ち倒して復讐を遂げよう、ということになって、ペルーの中央高原にいた人たちがスペインの味方をする。スペイン人に色々情報を流し、そしてスペイン人の指揮の下に軍隊が大きくなって行って、その軍隊がインカ人たちと戦って、インカが負けてしまいました。

4. 他の文明との比較

それぞれの時代の歴史が年表の上の方を見ていただくとわかります。農業が始まって、最初に大きな神殿や金細工ができたというのは、大体紀元前の1000年から紀元前の1500年。神殿の始まりはもっと古くて、紀元前2500年くらいということですから、日本でいうと縄文時代の後期から終わり頃にかけてですね。そして、国家が色々出来上がってそれぞれの国の王様が非常に立派な服装をして、綺麗な織物はどんどん作れるし、あちこちに都市ができていく。そういう時代は日本で言うと弥生時代くら

い。国家間のぶつかり合いが始まって、帝国が別の国家や民族を支配していくという歴史が始まるのが、西暦の700年800年、日本でいうと奈良、平安の時代にあたります。

インカ帝国自体が大帝国になるのは、15世紀、1470年頃、日本でいうと室町時代。いわゆる日本の戦国時代、信長とか秀吉が南蛮の品物、南蛮美術に魅せられた時代がありますね。南蛮というのは、要するにスペインやポルトガルのことなんですね。スペイン人はアフリカをまわって日本までやってきた。日本にキリスト教が伝わり、鉄砲が伝わる。それと同じ頃に、スペイン人はアメリカ大陸にも行って、インカ帝国とかアステカ帝国を征服する。日本はうまく西洋の影響を乗り切って、また日本独自の文化を創っていくわけですが、残念ながらインカ帝国の文化はここで一度途絶えている。これが大体の概要です。

しかし、一番始めから最後のスペイン人とぶつかるまではほとんど裸一貫の人達が自分たちの技術と知識と経験を積んで、土器を作ったり、金細工を作ったり、それから農業を、非常に沢山の色々な作物を開発して、農業を作った。あるいは、野生の動物を家畜化して荷運びに使うとか、あるいはウールをとるための動物として飼育するとか。それから、何よりも鉄が無いのに巨大な岩を切り出して磨いて綺麗に組み合わせながら、壮大な石壁を作るということですね。車もないし、鉄もない、大型の牛や馬といった家畜もいせんから、人間がその石を全部、からだ、筋肉の力で動かしたり積み上げたりしなければいけない。後で色々な写真があると思いますけれども、一つの石が5mくらいも高さがあるんですよ。一体何トンあるか知りませんが、そんな石を何百個もどこから切り出して持ってきて、ならべて積み上げていく。しかも、角がでこぼこしている不規則な形の石に次の石をピタッと合わせるわけですね。その見事さ、そういった技術などを独自に、誰からも教わらずに、どこかで見つけ出したということ。あるいは織物、美術展示室4にありますけれども、綺麗な織物がたくさんあります。1000年2000年経っても全く色褪せない毛織物や綿織物、そういったものを全く誰に教わることもなく作った。そういう所がこのアメリカ大陸の文明の面白さであります。私はこちらの専門家なので、つつい身最良になりますけれどね。そこに比べれば、中国だとかエジプトだとかヨーロッパの文明も大したもの、大変素晴らしいものですけど、実はこの人たちは常にシルクロードで交流があるんですよ。ですから、向こうで良いものが発明されれば、あっという間にこっちに伝わる。こっちでまた改良して、また向こうに伝わって、非常に広い範囲の様々な文化が相互交流して発達していく



わけですね。その点では必ずしも全部が全部自分たちだけの発明ではない。その点でいけば、このアメリカは全部自分たちで作った。そこが凄い。そういう特徴もある。

ところが、にもかかわらず人間とは悲しいものだと思うのは、折角良い社会を作っていて平和に暮らしているうちに、国家になって戦争を始める。国家間の戦争を始める。帝国として支配する。そういうですね、人間の基本的性格なのか知りませんが、そういうものである。ここから先は哲学的な問題になりまして、私も答えは出ません。人間の業みたいなのがあるんですね。皆さん平等に生きているが、もつれあって、そのうちに上に立ってしまう人とかいて、更に相手を征服して、自分の意思に従わせるような、そういうような人が出できたりするわけですね。しかし、そういう中でこそ、人間は人一倍の努力をすることがある。それによって、色々な品物とか芸術が発達するとかそういうことがあって、人間が持っている可能性が大きくなって、その大きな可能性が実際の現実となって花開くということもあります。そういうことが、今アンデス文明の遺物として、土器だとか石の彫刻だとか織物にですね、それぞれの時代のそれぞれの人がその時代を生きて、何か自分を表現したい、そういう気持ちで色々な表現を工夫した。そういう跡がこれらの品物に一つ一つ見られるわけですね。それをちょっとこちらから見ていきます。

5. 神殿更新

一般にですね、大きな社会、文化が発達するというのは、食糧がたくさんできるようになって、農業が始まって、そして食糧が余る。余ったので、ある人は余った食糧を食べて自分は農業をやらない。他の仕事をします。例えば、物作りをするとか、宗教の専門家になるとか、毎日畑を耕さなくても大丈夫になる。だから社会が発達して、今度は美術の専門家とか、様々な専門家が出てきて分業化されるということになって、社会が複雑になるということが一般的に言われます。

確かにそういう面もあろうかと思えますけれども、しかし、人は必要以上に余計な農業で生産を上げる努力を放っておいてもするのでしょうか？という疑問がある。例えば、野生の麦がたくさん生えている場所がある。そういう所は一週間くらい皆で仕事をして、家族皆で麦を刈れば、大体一年くらい食べていける。その次の年にまた野生の麦が生えてくる。そういう所では農業は発達していない。働かなくても食べられるなら働かない。その次は、焼畑農業のような豊かな農業でやっていると、自分の家族が食べられるだけのものを作ったら、それ以上一生懸命畑を広げて働こうとしない。一般的にそうなんです。そうすると、生産を上げるためには生産を上げようとする力がなければなりません。普通の農業をしているお百姓さんが自分の家族以上のものを作ろうとするのは、何か別のものを欲しいからです。例えばお金が欲しいとかですね。昔は、そんなお金が要らないような時代であれば、それ以上生産しない。自分たちが食べられればいい。ところが、それだったら社会がそのまま停滞しますから、食糧増産のためには何か別の力が必要。

そこでアンデスの場合はどうも、私どもは何回も色々な遺跡を掘っているのですが、農業が始まって間もなくの遺跡を掘っていきますと、どこでも神殿みたいなものが出てくる。何か普通の住居ではない、どうも公共的な何か活動をするための場所。皆が力を寄せ合って造るようなやや大きめの建物なんですね。それが作られると、ある時になるとそれが壊されて、もう一度また造り直す。造り直すたびにどうしても埋めてその上に造りますから、一つ前よりももっと大きくなる。そこでどんどん大きくなっていく。つまり、神殿所がそのままあればいいというのではなくて、神様との話をするときに神殿を造るんですけど、時々定期的に壊さないといけない、新しく造り替えなければいけないという習慣がアンデスにはあるらしい。ところが、後で調べるとメキシコやマヤにもある。あのピラミッドもどんどん大きくなっていく。

そこで私どもは、神殿更新という、神殿は常に新しくされなければならないという考え方が昔あったのではないかと考えたわけです。そうするとですね、神殿を維持していこうとする人たち、特に宗教の専門家がほんの一人でも二人いても、この神殿はあと10年後には壊して造り替えますよ、ということが決まっているんです。けれど、10年後どれだけの人間が必要になるか、労働するために、それに合わせてその人たち

が労働している間、食べなければいけませんから、その人たちの食糧を生産しておかなければいけない。そうすると農民たちに、神殿のために神様のためにもうちょっと余計にこれだけの仕事をしておいて、収穫を上げておいて下さい、ということで食糧増産を考えなければいけない。そうすると、どこかにもっとたくさん実を付けるトウモロコシがあるとかそういうことを聞けば、すぐにそれを取り入れて増産に励む、あるいはもうちょっと水を引くためにはどうしたらいいか、灌漑の水路を造る工夫をするとか、土地をもうちょっと畑に替えて広い畑にしていこうとか、というようなことで食糧増産のために色々工夫を始めていきます。



同時に、それだけたくさん大きなことをやって多くの人が集まるなら、儀式ももうちょっと盛大にしなければいけない。どうしたらいいか？もうちょっと音楽を増やそうとか、神様に捧げる品物にもっと立派なものを作ろうとか、段々そういうことになっていって神殿更新という習慣をベースにして、生産は増えるし、技術は改良されるし、それから宗教の儀式は複雑化するし、という形で文化の変化が非常に早くなっていきます。おそらくそういうことがあって、この文明社会は出来ていくのではないかと、そんなことを考えているわけです。放っておいたらそう簡単にはいきません。技術はあってもそれを進歩させようというある種の刺激、強制的な力が無いとなかなかそうはいかない、ということなのでアンデスの場合は神殿を造り替えないと駄目というある種の思想がそういう力を発揮したと思います。

そういうのを見ていくと、日本なんかでも伊勢神宮では20年ごとに建物を造り替えなさいとかですね、そういうことがありますし、メキシコなどでも52年経つと暦の儀式を営みなさいということがあります。それで、こういう一種の一サイクル終わると新しい時代が来ますよという還暦の思想みたいなものがあった。一つのサイクルが終わって別のサイクルが始まる。これはメキシコなどでは52年で新しい時代が始まる。そういう周期的に52年経つとまた一巡りして次の時代になる。日本や中国では十干十二支で60年とか、そういった違う二つの数え方を組み合わせて一つの体系にするというのはメキシコとかアジアにはある。ですからこういったものはもしかすると、古い時代にアメリカへ渡った人たちの頭の中に何か共通したものがあって、そこでアンデスの人たちはそういうサイクルではなくて、何か神殿をある程度経つと一回駄目になってもう一回造り替える。そういうような元々あった考え方が神殿を造り替えるという形で具体的な姿をとった。そんなことも言えそうです。

6. アンデス最古の金製品発掘談

さて、クントウル・ワシという遺跡なのですが、山の表面を削っていくと見事に階段とか石壁が出てきましたので、落ちていた石も組み直して復元致しました。これは日本の調査団が行った仕事であります。石の彫刻があるのも分かっています。この遺跡を掘っている時にお墓が出てきました。神殿の床下にお墓が掘ってありまして、そこから金の細工が出てきました。



こちらの展示ケースの十四人面金冠という冠や金細工をご覧ください。私たちは神殿の重要性というものを明らかにしようとしてクントウル・ワシの発掘をしてきたのですが、これらは1989年9月に発掘されました。ある建物の床、本殿みたいな一番中心部分の建物が一度埋められて、次の神殿になった。その新しい神殿を造る時に古い神殿を埋めている。埋めた神殿の一番上の床面の所に穴をあけてまた埋め戻したような跡が見える。そこに直径1.5mくらいの円形の穴が見つかり、これは何だろうということで一応掘ってみた。一週間くらい掘っても何も出てこない。でも確かに埋め戻した土、まわりの土壁とは違う。ずーっと2.5mまで掘りましたら、穴の壁の一部が石積みになった。人頭大のごろごろとした石をただ積んであるだけなんですけど、そこでピンとききました。長靴形になって足先の方がちょっと奥に入っている。その入口を石でふさいでるというわけですね。それでその石を取りましたら案の定人間の骨がありまして、土器だとか耳飾りだとか埋まっていた。人の頭が出てきてまして、その頭の横にも土器が置いてある。頭の後ろにもまだちょっと土が被っている。それを刷毛で取っていたんです。それで頭の後ろの土を除けていましたらちょっと黄色いものが見えたんですね。はじめは骨かなと思ったのですが2.5mの穴で横穴ですからかなり薄暗いわけです。そこで頭の後ろを刷毛で一はけ二はけ土を少しずつ取りましたら、ある大きさになったらピカッと光った。暗い闇の中に光が走るような形で光った。あっと思っ、これはもう金であろうと思いました。当時として、土器などか出てきますから、その神殿の年代は大体紀元前800年くらいと我々は見ていたわけですね。そこに金が出てくるといことはおそらく、ペルーで一番古い金である。盗掘や墓泥棒など別な所で掘られたものの中にいくつか似たような例がありましたので、我々もその時代に金があるのは分かっていたんですけど、まさか自分たちが掘り当てるとは思っていなかった。そして更に奥に掘っていきましたら何と冠だった。

ここに同じ大きさでレプリカですけど、展示してあります。これは、六角形の窓の中に人の顔がぶら下がっているといった表現ですね。この六角形はちょっとずれるんですけど、斜めの線と横の線との組み合わせを見てみると竹籠ですね。ですから、竹籠の目から人間の首が見えているという状況。ということは籠の中に入った首ですから、これはもう首狩りで切った首がたくさん籠に入っているという意味でありますから、これはどういうことかということ、それは神様に上げる。つまりこの冠を着けている人はおそらくこの生け贄の首を切って神様に届ける役割をする、そのような意味合いがある。それはあくまでもシンボリックな意味で、実際にそれをやったかどうかはわかりません。多分やってないのかもしれないけど、意味としては人間と神様の間を繋ぐ人であるというような意味になります。

それから別の墓からもこういう様なものが出てきてまして、冠と耳飾り、ぶら下げると上腕のあたりまで来るのですが、それからこの二つは鼻飾り、口が塞がる形ですね。

この鼻飾りは非常に複雑な模様が描かれている。真ん中にはおっかないジャガーのようなトラのような動物が牙を出してすごい顔をしていて、それから手が横から出まして、ちっちゃな人間二人の背中をガチッと掴んでいる。この人物は小さくて歯も無くて裸で殆ど赤ん坊に近い。ということで怪物と二人の赤ん坊ということになると、アンデスばかりでなくてコロンビア、エクアドル、ベネズエラと広く伝わっている双子神話

が思い出されます。怪物が女性を食べて、お腹の中から双子が出てくる。それを怪物が育てていたのだけれど、大きくなると双子の兄弟は本当の自分の母親を殺したのは育ての親である怪物と知って復讐をする。そして怪物の所から逃げ出すというような話がある。それで戻るついでにその怪物だけが知っていた火の起こし方、料理の仕方、作物の育て方、そういう秘密を知って、それを盗んで人間の世界に戻ってきて伝えたので、そのお蔭で料理も出来るし、作物も作れるようになった、という神話がある。それを思い出させるような図柄ですから、このクントウル・ワシの神殿の床下に埋められていた人たちは、そういう神話とかあるいは、神様と人間の関係を示す思想としての生け贄、そういうものを表す品物を身に付けていた。そして埋められていた。ということですから、宗教の専門家と思われます。この時代から金細工がはじまります。

7. 金製品の歴史

当時は、砂金を掘り出して溶かして金にして、多少銀を混ぜた可能性はありますけども、非常に純度が高い。しかも金と銀くらいしかない。金の含有量は80%90%ですから、錆びたりしない。というようなことで、今日まで輝きを失わずに残っています。この金を特別なもの、非常に高い価値を持つ金属だと見たわけですね。それ以後、権力者は色々な金を身に付けるんです。モチェ文化というクントウル・ワシから1000年後になる文化では、王様たちは金で体を飾り立てます。さらにその後1000年経ったシカン文化の口ロ神殿からも沢山の金を身に付けた人物の墓が見つかりました。そして最後のインカは、王様の部屋は全部金張りです。それから太陽神殿があって、そこのお庭にはトウモロコシなど作物が植えてあるのだけれど、トウモロコシでもなんでも全部金で造ったものを植えてある。家畜も金です。アンデスの世界を全部金で作って再現した。それくらい金を使っている。金は特別な価値があると思ったんですね。

しかし、考えてみると、他の世界でもツタンカーメンのエジプトも、メソポタミアも中国も、どこへいってもやはり金なんですね。これも全く偶然見つけたと思うのですが、金というのに対して特別の重みを与えている。この辺りも人間の歴史として共通していて非常に面白い。お蔭であまりにも金を取り過ぎてインカ帝国は滅びてしまう。

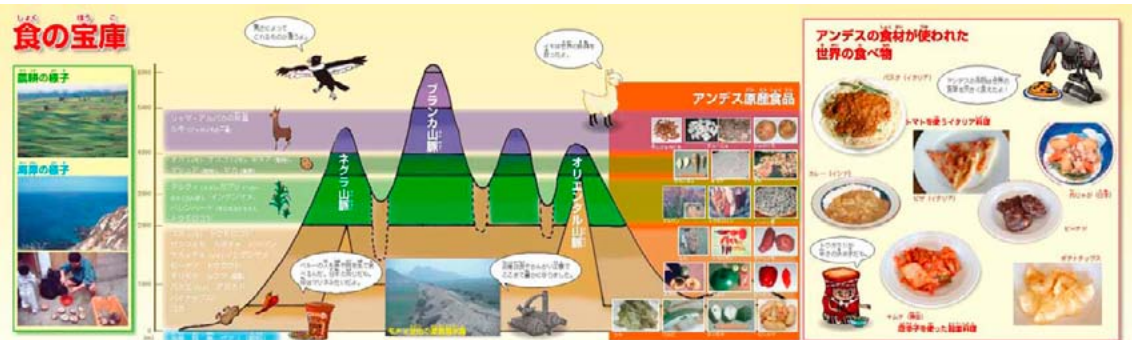
8. アンデスの農業と経済

古代のアンデスでは面白いことに商業がありませんでした。ですから、通貨を必要としません。ここで、アンデス文明の食糧についてお話ししましょう。アンデスの人々は何を食べていたのか？太平洋沿岸では海藻や貝や魚がいくらでも獲れますから、それが一つ。それから、やや低い所、暖かい所でトウモロコシ、サツマイモ、カボチャ、ピーマン、インゲンマメ、ピーナッツ、アボカド、トマトなどといった物が作られています。少し高い所にいきますと、ジャガイモやその他のものができます。一番高い所で家畜を飼う。そういうような生活をしており、海岸地帯ではタンパク質といえば魚介類がありますし、あとは農業でなんでも採れますからそれで自給自足できる。山の方では、上の方で動物を飼って、途中でジャガイモそしてトウモロコシと土地を使い分けて一つの家族が上から下まで利用する。あるいは村でお互いに補足し合いますから、殆どが自給自足です。ですから何でも食べたいものはある。たまに海産物が上に届けられてジャガイモなどと交換していた。そういうことで若干の交換はあるけれども、基本的には自給自足である。

それから権力者が神殿を造らせる、織物を専門家に織らせる、そして自分の所へ全部集めて必要に応じて配下の人に分け与える。つまり再分配経済というのですが、大体基本的に食べるものは自分たちで間に合う。非常に綺麗な織物や特別なものは神官や王様がくれます。サービスを提供するとご褒美をくれる。となると商業がない。間に立って貨幣を使うことがないので、インカ帝国に至るまで商業が全く発達しません。そういう面白い所があります。メキシコの方はちょっと商業が発達する。アジアからヨーロッパは非常に商

業が発達する。

9. 品種改良



野生の状態から栽培化して作ようになった作物が無数にある。最も代表的なものがジャガイモやトウモロコシ、インゲンマメ、トウガラシ、ピーナッツ、サツマイモ、カボチャ。

トウモロコシは最初3cmくらいで粒が2つか3つしかついていない。それが今やこんな大きなサイズになっている。野生のジャガイモは直径1cmくらいだけれども今では直径5cmくらいはある。ですから、野生から栽培化する所まで開発していく、品種改良していく間に体積が125倍になった。これは言ってみれば、お米一粒が125倍になる。つまりおにぎりの半分くらいの大きさになる。そのくらいの品種改良をしている。しかし、日本をはじめ中国、東南アジアのお米、ヨーロッパの麦はいくら品種改良しても野生の状態のものとあまり変わりません。悔しかったら一粒のお米がおにぎりの半分くらいの大きさになるものを作ってご覧なさいということになるのですが、アンデスではまさにそれが起きております。

アンデスではジャガイモの種類が何百もあり、味は確かにおいしい。一番まずいのは世界中に広がっていった白いジャガイモ。我々の食べているジャガイモがアンデスの中では多分一番まずいジャガイモである。アンデスのジャガイモはおいしいのですが、残念ながら量が沢山とれない。白いジャガイモは大きくなって、量もとれるので世界中に広がってしまって、我々は一番まずいジャガイモを食べているのであります。最近北海道りで小さいけれどおいしいアンデスのジャガイモを作っている人もいます。ですから我々は、この資本主義のグローバリゼーション的な最先端の経済に負けてはいけなないのでありまして、そういうので一番都合の良いと選ばれたものを食べないで、もうちょっと独自のものを小規模ながら作って、ぜひとも世界の食糧の多様性と、種の多様性を維持しなければいけない。

アルパカも同じことが言えます。ペルーでアルパカは沢山飼育されて増えています、なんと白いアルパカばかりになっているのです。黒や茶色やぶちのアルパカなど色々ある。ところが、今や白いアルパカばかり増えている。なぜか？アルパカの毛を買う羊毛業者は白い色だと何色にでも染められるので客の要望に合わせた色を作れる。黒いアルパカだと黒にしかならない。だから白が良い、というので業者が白しか買わない。そうすると作るほうも白いアルパカばかり育てるようになる。ある日気が付けばアンデス中のアルパカは白しかないということになりかねない。そのようなこともあり得ます。

トウモロコシも大きなものを一つ一つ茹でてからはずして、一粒一粒を皮をむいてから食べる様な大きなものもある。日本でも昔、白い大きなトウモロコシがあって私も食べた記憶があるんですが、今ではないですね。黄色いトウモロコシしかありません。しかし写真にものっていますが、黒いものもあれば実の先端が尖っているもの、三角形の細長い実をつけるものなど色々なものがある。それぞれに味があります。是非ともお試し頂きたいと思います。

その後のことを考えると、ジャガイモ、トウモロコシ、キャッサバ、トマト、トウガラシ、カボチャといったものがアメリカで作られてきて、コロンブスが所謂アメリカを発見するまではヨーロッパからアジアにかけて誰も知らなかった。ですから、トウガラシのあの辛みを知らないと、カレーライスも辛くならない

しキムチも白いという状況になります。ですから、こういった食物の歴史、味の歴史というのはあまり古くないということが分かります。そこで、イタリアの方ではトマトなどアンデス原産のものを何も使わないでピザを作った人がいたそうです。そういったこともあって伝統というものも意外と根が浅く簡単に出来てしまうこともある。そんなことも我々に教えてくれているわけです。

10. ティワナク文化

あともう一、二点短くお話しします。

ペルーとボリビアの間にチチカカ湖という大きな湖があります。この湖のほとりにティワナクという遺跡があります。これはボリビアの方に入っていますが、ここに巨大な石を細工した文明が栄えました。インカ帝国よりも少し前の時代であります。日本の古墳時代から始まって、平安時代くらいに発達したのですが、海拔3800m、富士山の頂上くらいの所が一番低い所です。あとのまわりの土地は全部高い所。こういう所に大都市を築いた。ここに並んでいる土器などもティワナクの作ったものです。

ちょっと戻ったジョッキのようなコップが沢山あります。これは、ティワナクの土器に特徴的なものでトウモロコシから作るお酒を飲む道具である。この形が現在まで受け継がれているのですが、必ず上が広がった形です。これでビールを飲む。非常に根強い影響を残していて面白い。

11. 全て手作り、手作業

その後インカ帝国になります。先ほど言ったように大きな土地を征服して一つの国家にまとめあげた。そのインカも含めて全体を見てアンデス文明の特徴と言うのは、機械が全然ない。ですから全部手作り。何か物を運ぶのも人の力。車もないし、家畜にも乗せられない。結局人の力で運ぶしかない。写真で人が沢山集まっていますが、そこに写っている石壁は全部本物です。巨岩を切り出して、運んで、積み上げる。こういったことは全部人力です。ということで、手作りのすごさ、手作りでどれだけのことが出来るのかということを示している。一休現代のハイテクノロジーの建設と比べた時、今のハイテクは電気も使う。石油も使う。猛烈な機械とエネルギーを使って大きな物を作ります。ビルディングにしても何にしても。この建物にこれだけの石を運んできて、積み上げて作りなさいといわれても、現在のハイテクノロジーではできない。そうなるのとどっちが良いか。アンデスの場合、エネルギーは人間に食べ物を与えれば良い。人力だけでできないものもあるのですが、現在のハイテクノロジーについて考え直す契機を与えてくれるような気がします。

アンデスの布は2000年経っても色褪せることなく残っていますが、それぞれの布が非常に面白いデザインで、細かいところで工夫している。レースも編み物の中で色々な模様を出す。絞染めや綴れ織りなど。経糸と緯糸を織り交ぜながら織っていきますから手作業なんですね。大変な手作業なんです、その手作業のお蔭で逆に機械ではできない表現方法が沢山できている。これはごく一部ですが、本当に何



万枚と作ったんですね。これをつくるのにどのくらいの人がどれだけ努力したのだろうと思うと、やはりその背後にある社会の力といいますか、文化の力が感じられます。こういったことがアンデス文明の特徴と言えると思います。そろそろ時間ですのでここで終わります。本日はどうもご静聴真に有難うございました。

エジプト文明親子講座

平成 17 年 8 月 21 日 13:30 ～ 15:00 （於 人類史展示室、参加者 50 名）

村治笙子

古代オリエント博物館非常勤研究員

本日のエジプト文明親子講座では、資料を見ながらエジプトの紹介、そしてエジプトの古代文字ヒエログリフについてのお話をしたいと思います。ヒエログリフでカルトウーシュの中に自分の名前をスタンプで押せるようになっていますので、のちほど体験していただきます。

1、エジプトについて

エジプトと聞いて思い出すことは何ですか？砂漠にあるピラミッド、ヒエログリフ、ナイル川、パピルス、ツタンカーメンなどが挙げられるでしょうか。

まず始めにナイル川ですが、エジプトは砂漠でそこにピラミッドやスフィンクスがあると思う方も多いと思いますが、実は日本と同じ農業国で畑がたくさんあります。

古代エジプト人の一番の特徴といえば、来世観になります。古代エジプト人は農業ができるナイル川のほとりでのんびりとした暮らしをしていましたので、来世、つまり、死んだ後も同じ様に向こうの世界で農業をしながら幸せな暮らしをしたいという願いを絵に表しています。他にも牛がいて、その下にはナツメヤシという植物、さらにその下にはナイル川の運河が流れています。現在、エジプトはイスラム教の国ですが、古代エジプトでは、多神教で日本と同じように八百万の神様がいらっしゃいました。イスラム教には断食があります。断食あけのお祭りの時に一番最初に食べるのが、このナツメヤシになります。身体にとっても良く、水分をとらなくてもいい食物です。

古代エジプト文明は、B.C.3000からB.C.30まで、クレオパトラがローマに滅ぼされて属州になるまで、およそ3000年もの長い間続きました。ところが、文明がおこった5000年前も、一番栄えたラムセス2世の頃(今から3500～4000年前)であっても、農作物はあまり変わっていないことが壁画からも分かります。そういった古代エジプトに作られた壁画が、こんなにきれいな色で残っているのです。



2、エジプトとロータス、上エジプトと下エジプト

古代エジプトは、ナイルのほとりにあり、そこには、エジプトのブルーロータスという花が咲いていました。ロータスはよく蓮と言われますが、蓮と睡蓮は根や葉のつき方に違いがあります。エジプトのロータスは熱帯睡蓮です。ロータスは朝日を浴びると花びらが広がり、上から見るとまるで太陽光線のように見え、さらにとてもよい香りがする花でし



た。そういう風に沼地に咲く花ですから、このロータスの花を聖なる花、聖なる太陽神ラーの花といっていました。死者がロータスのよい香りをかぐ姿もたくさん描かれています。

ナイル川はスーダンの国からエジプトに入ると支流がなくなり一本線、つまりひとつになります。地中海、海の方に流れていく所にはいくつもの支流ができ、周りに畑が広がっています。ナイル川は一本の所とデルタ地帯に分けられます。その形はロータスの花と茎によく似ています。花の部分、茎の部分にあたるナイル川渓谷地帯は気候と風土も全く異なり、住んでいる人の性格も少し違っていました。花のがくの根元あたりに三大ピラミッドのあるギザがあり、今のエジプトの首都カイロもここに 있습니다。古代エジプトでもこのあたりが政治の中心地で、一番大切な所になっていました。

ナイル川の水はアフリカの方から流れてきます。ナイルのほとりに住んでいる人がみんなエジプト人になります。エジプトには上と下に二つの国があり、ロータスで例えると、茎の方が上流なので上エジプト、ロータスの花の方は下流なので下エジプトと呼びます。王様はこの二つの国を統一して王位に就きました。エジプトの王様の冠は赤い冠がデルタ地帯、下エジプトの冠、白い冠が上流の上エジプトの冠でした。王様はこの二つの冠をかぶって玉座に座りました。冠の正面には、コブラがついています。さらに、王様はひげをつけて、大きなビーズでできている幅広のネックレスをつけていました。神様になると曲がったひげをつけますが、生きている王様は真っ直ぐなひげをつけました。上エジプトと下エジプトの冠を二重冠とか複合冠といいますが、ここにコブラを付け、ひげを付けた姿で王様は玉座に座ったのです。さらにツタンカーメンは二本の王杖を持っています。

ほかには、ハゲワシの姿をした女神様の冠もあります。ハトホルという女神様は、雌牛の角に太陽の円盤を乗せています。このように、エジプトの神様の頭にはいろいろなものが乗っています。

3、ヒエログリフについて

ヒエログリフを発明したのは、エジプトではトトという神様といわれています。これはアフリカクロトキです。

「死者の書」

パピルスの紙に書かれているのが「死者の書」といわれているものです。人が死ぬと、死者の国の神様 オシリス神が心臓と羽根を天秤で量ります。オシリス神の神話では、オシリスが現世の王様だった時、セトという悪い弟に殺され死体をバラバラにされ、エジプト中に流されてしまいます。その時に、ここにも書かれている妹：イシスが探しに行ってエジプトの国内からオシリスの体を集めてきて、犬の姿の神様：アヌビス神にミイラを作ってもらい、来世に復活しました。オシリスは現世の王様にはならず、来世の王様になったのです。

エジプトの人は死ぬと、遺体をミイラにしてみました。ミイラにすると永遠の生命がもらえるという思想があったからです。ミイラにする時、内臓、肺、胃、腸、肝臓はカノプス壺に入れます。心臓は大切に、この心臓とマアトの羽根、これは真実の羽根といって、正しいことをしているという行いの印になります。天秤にかけてうまくつりあうと、この人は現世で悪いことをしなかったとオシリスが判定をします。その様子を記録するのがトト神です。裁判でもう一つなくてはならないことは、42人の神様に向かって私は悪いことをしなかったという告白をする、42の



告白です。42の告白には、盗みをしなかった、うそをつかなかった等、小さな過ちから、殺人をしなかった、夫婦間では不倫をしなかった等の告白があります。そういう日常的なことも含めて、その言葉が正しいければ、この人の言葉は正しいということで「マアケルウ（声正しき者）」という称号をもらいます。死者の名前の後ろにはこの言葉がついています。それで、来世も現世と同じようにナイル川のほとりでたくさんの食べ物を食べながら家族と一緒に楽しい暮らしができるのです。

もう一つ大事なものは、生命のシンボル、生命の護符、アンクです。アメンヘテプの王様もアンクの護符を持っていました。古代エジプトのヒエログリフでは、鏡や花束にも使われますし、サンダルにも使います。ヒエログリフの文字については、表を見ていただきたいのですが、エジプト人のそばにあって身近に目につくものが文字になっています。ハゲワシ、手、足、壺の台、草で作った囲い、あしの穂、フクロウ等があります。のちほどヒエログリフで自分の名前をスタンプで押してみましょう。

4 スライドを見ながら（抜粋）

【カバの像】カバの体にはロータスの花、睡蓮が、首にはロータスの葉も描かれています。カバの実物資料は小さなものですが、結構目を引く資料です。

【ツタンカーメンの壁画】ツタンカーメンの頭にはコブラがついています。短いカツラをつけ、目はコホルをつけたようにはっきりと書かれています。エジプトの絵の描き方で、顔は横向きなのに、どうして目や肩は前向きなのかという質問を受けますが、古代エジプト人は、年齢とか年をとったというよりも、永遠なものを求めていたので、永遠に美しく見えるよう一番特徴のあるところをあわせて描きました。ですから、描かれる絵は写実的ではありません。一見、写実的で写生のようにみえるけれどもそうではないのです。永遠に美しく見えるように描いたのです。



【二重冠をかぶったホルス神の壁画】これは、さっきご説明をしました上エジプトと下エジプトの冠が合体した二重冠をかぶっているハヤブサの神様、ホルス神です。周りには、「イシスの息子のホルス」とヒエログリフが描かれています。また、ホルス神はネメス頭巾をかぶっています。

【アヌビス神の壁画】ミイラを作っているアヌビス神が、描かれています。ミイラはオシリス神を表わしています。古代エジプトの人は亡くなったらミイラとして包帯を巻かれて、オシリスとしてお棺の中に入ります。

【ヒエログリフのレリーフ】レキートと呼ばれる鳥は「人々、人民」を表わします。かごは「全て」という意味がありますので、ヒエログリフより全ての人民が礼拝しているという意味になります。右上には、カルトウーシュがありまして、ラムセス2世のヒエログリフが描かれています。

5 展示資料の説明

【アラバスター製容器】アラバスターというのは昔は雪花石膏と呼ばれていましたけれども、方解石のことです。光を当てると中が透けて見えます。しかし、水に弱いのです。私がエジプトに行った時一緒にお連れした方が日本からおかゆを持っていかれました。調子が悪いのでおかゆを食べることになり、向こうで手作りのアラバスターの入れ物を買っておかゆを入れお湯を注いだ所、パーッと割れてしまいました。それ程、水に弱い素材です。乾燥している所で使用するのはいいのですが、水は入れられません。



【青年像彩色浮き彫り】カツラをつけたエジプト人が描かれています。茶色の肌をしているのは古代エジプトでは男性を表わし、女性はまだ少し白く黄色っぽく表現するように決まっていた。



【礼拝者の彩色浮き彫り】浮き彫りレリーフには横の方にヒエログリフが描かれています。今日は光記念館の学芸員さんにこの資料を展示ケースから出してもらいましたので、皆様も近くでしっかり観てみましょう。

このレリーフにもヒエログリフが描かれています。つのへび、長いへび、手が彫られていますので、「彼に言う」「彼は言う」という意味になります。カツラの部分も細かくできています。この石は石灰岩です。古代に限らずナイル川の両側はすべて石灰岩の大地ですので、石灰岩が一番手に入りやすいし、また加工もしやすかったのです。その中でも、良質の石灰岩というものもあります。

また、ヒエログリフは横書きでも縦書きでもいいですし、右から書いても左から書いても問題はありません。

6 最後に

エジプト学では、まだまだ分からないことがたくさんあります。いろいろなものが発掘されていますが、分からないことの方が多いのです。ですので、いまここにいるお子さんがエジプトのことに興味を持ってくれて勉強をしたら、エジプト学者になれるかもしれません。今日参加のみなさん、是非、エジプトのことを勉強してみて下さい。私もこんなにお話をしていますが、分かることを話しているので



す。まだまだ分かっていないことはたくさんあるのです。エジプトを研究している人は、この長い3000年の間を全部答えられるとは思ってはいけません。私達が、縄文、平安、奈良時代のことを聞かれても、すぐには答えられないようにエジプトも分からないのです。ただ、変わっていないことがあります。それは、来世に対する考え方、死んだらあの世で生き返り復活すること、オシリスと共に長く生きることができる、そういう考え方、又ナイル川は変わっていません。

今日は、講座に参加していただきありがとうございました。

縄文の耀き講座

平成 16 年 5 月 30 日（日）13:30 ～ 14:30

岡田康博

文化庁文化財部 記念物課 文化財調査官

1. はじめに

最近注目されている遺跡、あまり報道されていないが重要な遺跡、あるいは個人的に興味を持った遺跡などを紹介します。全国には約440000箇所の遺跡があり、毎年約8000件の発掘調査が行なわれています。おそらく世界で最も多く発掘調査が行われている国でしょう。それは発掘調査の原因となる開発事業が多い、狭い国土に遺跡が数多く密集して所在する、遺跡保護の仕組みが整備されていることなどによります。それらの発掘調査のほとんどは道路を作るとか、建物を建てるとか、何らかの開発によって遺跡が壊される場合に事前に行われるものです。したがって、通常は発掘調査が終わると遺跡は工事によってなくなってしまいます。記録や本、映像でしか見ることができない遺跡もたくさんあるわけです。最近は開発事業そのものが減っていますので、遺跡が壊される機会が少なくなっていますし、遺跡を保護するために開発計画を変更するなど、遺跡がなくなること前提とした発掘調査は減る傾向にあります。

それから、これまでの発掘調査の成果をまとめて積極的に情報発信したり、それらを地域の中で活かそうとする動きが見られるようになってきました。遺跡をより分かり易く、簡単な表現や映像を使いながら楽しんでもらうことを目的し、子供達を対象とした体験学習や市民参加のイベントも行われています。遺跡がいろいろな形で活用されるようになってきたわけです。いま、遺跡を取り巻く環境は「掘る」から「残す・活かす」へ大きく変わろうとしています。

マスコミは衝撃的なことは報道しますが、その後それがどうなったのかは報道されることはあまりないと思います。数年前にある県で旧石器時代の人骨が見つかったと新聞の一面でしかもカラーで報道されましたが、これは全くの誤りでした。すぐに年代が違ふことは報道されましたが、謝罪を含めてその顛末が詳しく報道されたことはありませんでした。遺跡も話題になったときにはいろいろと報道されますが、一過性の場合がほとんどです。その後に関しては以外と情報がない。続報がない遺跡というのは以外とたいしたことはないのかもしれませんが。一方では、報道されない遺跡でも重要なものが確実にあるはずですよ。遺跡の価値は報道の多寡では決めるものではないと思います。マスコミは最大、最古といったキーワードが大好きですが、そういったものとは無関係でも地域の歴史や文化の成り立ちを考える上で重要な遺跡があると思います。

青森県三内丸山遺跡

私は生まれも育ちも青森県で、約10年間三内丸山遺跡の調査、研究に携わってきました。三内丸山遺跡は縄文時代の遺跡で、国の特別史跡です。縄文時代の開始は約13000年前で、終わるのは約2300百年前、その間約10000年間は縄文時代です。縄文時代の特徴は大きく2つあり、土器と弓矢の発明です。三内丸山遺跡はちょうどその縄文時代の中頃、約5500年前から4000年前の間、営まれました。東北の縄文文化がもっとも大きく花開いた時代の遺跡です。三内丸山遺跡は江戸時代から知られ、1992年から発掘調査が本格的に行われました。最初は野球場建設の為の事前調査が行われていました。大型の建物跡や大量の土器、石器、土偶などが見つかり、大変重要な遺跡だということで野球場建設工事を中止し、保存・活用することになりました。その後国の史跡となり、さらに特別史跡、つまり遺跡としては国宝級の遺跡ということ



になりました。そして毎年、遺跡の全体像解明のための発掘調査が行なわれており、数々の発見がありました。まず、遺跡（ムラ）の西側には道路が続いていました。南北の道路も見つかり、この道路は今わかっているだけで360m延びていることを発掘調査で確認しています。さらに南側へ延びていて、おそらく隣ムラに続くものと考えられます。東西に420m、南北に360m道路が延びている範囲は間違いなくムラの範囲と考えられます。道路といっても現代のものとは大分違います。最も幅が広いところで12m、平均して7～8mです。東西の道路の方が道幅が広く、南北の方が若干狭いようです。東西の道路は海の方へ延びており、この先にはまだ見つからない港湾施設、船着き場があるのかもしれませんが。ムラのメインの入り口は東側、海の方にあるものと考えられます。そして南北の道路は隣ムラに行くための道路です。南北の道路の脇にも、石が直径約4mの円形状に配置された小さなストーンサークルに囲まれたお墓が作られています。このようなお墓が南北の道路の脇に点々と並列に並んでいるわけです。遺跡を俯瞰すると、ムラの中心か



ら東西と南北の道路が延びていて、ムラの南側に小さな谷があり、さらに谷を越えて道は延びています。谷の南側は三内丸山遺跡の隣、近野（ちかの）遺跡になります。

青森県近野（ちかの）遺跡 縄文時代のトチの実の水さらし場

近野遺跡は三内丸山遺跡の南側に隣接した遺跡です。縄文時代中期で、三内丸山遺跡が最も繁栄する時代とほぼ同時期であることがわかっています。したがって三内丸山ムラの一部とする考え方もあります。三内丸山遺跡では南側の近野遺跡へ向かって調査を継続して行ってきたし、近野遺跡では美術館建設に伴い大規模な発掘調査が行われていました。隣り合う遺跡を面的に調査をするというのはあまり機会がありませんので、隣り合う二つのムラがどのような関係にあるのか、関心を持っていました。発掘調査の結果、まずこのふたつのムラには違いがあるようで、三内丸山遺跡に見られるような大型施設がこの近野ムラにはないらしい。太い柱を使った高床建物や盛土遺構などが無い。ただし大形竪穴住居はあります。土偶もほとんど出ていない。隣ムラではありますがいろいろ違いが見られる。そういう意味では近野ムラは通常の生活が営まれたムラで、三内丸山ムラは宗教的行為、まつりや儀式が行われていたのかもしれない。

この近野ムラでは小さな谷のひとつから水場遺構が見つかりました。谷からは常時湧水があり、その下流には水槽のような水を溜める施設があったわけです。板材で囲み、角には杭が4本打っていました。板材を組み合わせて長方形の水槽を作り、水が溜めていたらしい。あふれ出た湧水は下流に流れるわけです。縄文人は、湧水を貯めて何かをしていたことになります。この水場遺構の周辺からはトチの実の皮が大量に見つかりました。おそらく、トチの実のアク抜き処理に関係した施設と考えられます。アク抜きをしなければトチの実は食料として適しません。それ以外にも植物の種が集中して見つかりますから、単純にトチの実だけの処理施設というだけでなく、他にも何かここでいろいろと作業していたのかもしれない。

使われている板材はほとんどがクリです。となりの三内丸山遺跡でもクリの実がたくさん出土していますし、使用されている木材もクリがほとんどで、炭も9割がクリでした。クリ以外ですとサワグルミ、トチも使われています。ムラが営まれた前半期は圧倒的にクリですが、後半になるとクリが少なくなり、トチが増えてくることが知られています。クリからトチへと変化をしているわけです。その理由をよくわかっていません。クリがだめになったのか、あるいはトチのアク抜き処理の技術が開発されたためにそうなったのか、いろいろと検討されています。

今回見つかった施設の年代はクリが増えて、トチが増えている時代のものです。しかし、使われている板材はクリです。それは依然としてまわりの林や森にはクリが多かったことが考えられます。それからクリは耐久性があり、長持ちしますから建築材としては最適です。ひょっとすれば古い板材が繰り返し使用、再利用されている可能性も十分に考えられます。東日本の縄文文化はクリの文化であることを示す例だと言えます。この水場遺構は貴重であることから、現地で保存されることになりました。一度取り上げて保存処理を施した後、展示されることになっています。



北海道鷲ノ木5遺跡 道内最大の環状列石（ストーンサークル）

道南の森町に所在する、約4000年前の縄文時代後期の環状列石です。函館から車で1時間ぐらいのとこ



ろにある、噴火湾に面した町で、イカメシで有名です。その森町で大規模なストーンサークルが見つかりました。大きく二重の円で、直径が約37mですから規模では日本のベスト3に入るものです。ちなみに最大のものは秋田県大湯環状列石です。このような大規模な環状列石が見つかったのは、高速道路を建設することで発掘調査を行っていたら、路線の真ん中から環状列石が見つかったわけです。予定では環状列石のある所を含めて全て地面を掘り下げて工事をする事になっていました。もともとこのような環状列石があることがわかってはいませんでした。もし、あることがわかっていれば、そこをわざわざ高速道路を通すということにはならなかったと思います。わかっていれば路線を変更することができたはずですが、残念ながらわかりませんでした。なぜわからなかったかという、この付近一帯は駒ヶ岳の江戸時代に降った火山灰で厚く覆われていました。それから、山の中ですのであまり人が頻繁に入っていく所でもなかった。普通、遺跡があるかないかどうしてわかるかという、土器や石器が落ちているからです。例えば畑を耕作していて、地中のものが地面に顔を出すという場合があります。ここは火山灰が1m近く堆積していますから、地下の土器や石器が顔を出す機会はほとんどなかったと思います。たまたま工事用道路を作っていたら、土器が見つかったために遺跡があることがわかり、発掘調査をすることになりました。火山灰をどけたら、その下からこのような環状列石が出てきたわけです。

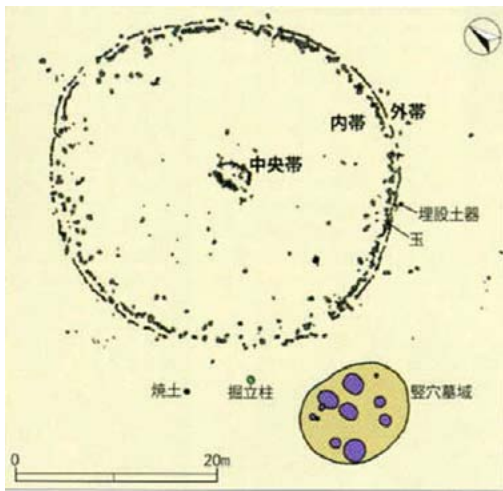
道内ではこの環状列石が最大規模となります。円形に見えますが、長軸37m、短軸34mですから正確には南北に長い楕円形をしています。石ですが二重の円の外側の石が小さく内側の石が大きい構成になって

います。内側の石はかつて全て立っていた可能性があります。今でも多少傾いていますが立っている石が見られます。それから所々に円が途切れている場所があり、全部が繋がっているわけではありません。どうも出入口があるらしい。また、一気に円形に石を並べるのではなく、時間をかけて最終的に円形になったものと考えています。使われている石は遺跡の近くで調達したものではなく、ここから上流約5kmぐらいの所からわざわざ運ばれています。本州の例ですと約3000の石で環状列石を作っていることもありますから完成までに相当な労力、時間が必要としたと思います。また、環状列石の南西側から大規模な穴に作られた集団墓地が見つっています。

環状列石は、北海道、東北、関東、中部まで広く見られますが、大きく二つの種類があると考えられています。ひとつは石の下にお墓があるもので、環状列石自体が墓地という場合です。もうひとつは石の下にお墓はなく、石だけを並べている場合です。ですから墓地としての環状列石とまつりの場である環状列石とがあるわけです。この環状列石の場合は石の下には墓がないらしく、そういう意味ではまつりの場なのかもしれません。環状列石の中に墓は作らないけれども、すぐ近くには墓を作る配置となっていて、北海道独特のものであるのかもしれません。ですから非常に珍しい環状列石です。

この環状列石の素晴らしい所は、江戸時代以降全く人の手が加わっていないということです。火山灰で覆われていましたから江戸時代の状態で保存されているわけです。耕作などによって石が動くとか壊されるということはなかったらしい。ひょっとすれば縄文時代の姿をそのまま留めている可能性もあります。できればこのままの状態で、あまり掘らないようにして保存したいのですが、ここは高速道路の路線のど真ん中です。予定ではここを10m程掘削をすることになっています。工事計画を変更しない限りこの環状列石を保存することはできません。近くでは橋脚もできていて、今更高速道路のルートを変えろというわけにはいきません。ひとつの考え方として、この環状列石の下にトンネルで高速道路は通せないかと検討しています。ただ、地盤が火山灰で非常に柔らかい。高度な技術も必要ですし、細心の注意で工事をする必要があります。経費も多くかかるかもしれません。報道では100億円必要だとも言われました。本当にそんなにかかるかどうか分かりませんが。こういう状態の良い環状列石は日本中でここしかないわけで、非常に大事なものです。もっと時間をかけてきちんと調べればさらにいろんな事が分かってくると思います。そういう貴重な国民共有の財産を壊してしまうわけにはいきません。まだ保存とは決まっていません。保存に向けて関係者と厳しい協議が続いています。

環状列石はもともと本州で発生したものと考えられていますが、それが北海道でも見つかったことは縄文時代において本州と北海道の交流が頻繁にあったということがあらためてわかります。この環状列石は、多分これからマスコミで多く取り上げられるでしょう。果たして、この遺跡が保存されるかどうか、注目していただきたい遺跡です。個人的な感想ですが、ここ数年見てきた遺跡の中では三本の指に入るくらい印象に残ったすばらしい遺跡で、縄文人の世界観をよく示している遺跡です。



福岡県正福寺（しょうふくじ）遺跡 袋に詰まった木の実

福岡県の正福寺遺跡は約4000年前の縄文時代後期の遺跡です。谷を掘ったところ、当時の水辺、谷に沿った両岸から貯蔵穴がたくさん見つかりました。その穴の中には植物を利用した籠や袋のような

編み物の中にイチイガシという木の実がびっしりと詰まっていました。低湿地ですから水漬けの状態で、非常に状態よく保存されていました。袋の上下が立体的に識別できる非常に珍しい例かと思います。経糸と緯糸で編んでいることがわかります。びっしりと詰まっている袋もあれば、全く何も入っていないものもありいろいろなパターンがあります。水辺に穴を掘って木の実を保存する理由は虫の駆除やアク抜きのためだと考えられています。天然の冷蔵庫といったところでしょうか。残念ながら発掘調査したこの場所は道路になってしまうので、穴ごと切り取って持ち帰り、丁寧に土を除去した後、袋については樹脂で強化し展示する予定です。袋以外にも木の実をすくうための道具や柄の付いた石斧などが出土しています。

最近縄文時代の遺跡でも台地の上だけではなく低地も発掘調査を行うようになってきた。そうすると低地から水場遺構や道路が見つかり、低地での生活や水の利用の仕方などが具体的にわかるようになってきましたし、台地上と低地での生活が立体的に復元できるようになってきたと思います。

群馬県西鹿田中島遺跡、静岡県大鹿窪遺跡 最古の定住集落

群馬県にある約11000年前の縄文時代草創期の遺跡で、最近史跡に指定されました。草創期の遺跡といえば洞窟とか岩陰に住んでいたというイメージがありますが、この遺跡は全く平坦な非常に開けたところにあるます。地面を掘って作った住居の可能性が高い竪穴遺構や食料貯蔵のための穴が見つっています。まだ一部しか掘っておらず、全体の様子が明らかになっていませんので早計かもしれませんが、ムラと呼んで構わないのではないかと考えています。東日本では

こういう開けた平坦地に居住地を造る場合と洞窟とか岩陰に居住する場合とあり、これまでは洞窟や岩陰の遺跡を調査する機会が多かったのですが、このような開けた場所にも当時居住していたことが明らかとなりました。貯蔵穴があることから定住性が高かったものと考えられます。また、住居の廃絶の様子から繰り返しの地で居住していたことがわかりました。

最近では静岡県でも草創期の集落跡が見つっています。縄文時代初期にも平地にきちんとした施設を持っ



たムラが出現していたことがわかります。縄文時代の本格的なムラは様々な施設を持っていたり、土地の利用の仕方に規則性があるとか、その様子が具体的にわかってきていますが、いつからそのようなムラが成立したのかについてはまだ資料が少なくよくわかりません。

宮崎県本野原遺跡 西日本最大級の集落跡

九州を代表する約4000年前の大規模な縄文時代後期の集落跡で、最近史跡に指定されました。環状集落といって、中央広場を中心に竪穴住居や墓などが環状に分布する構造です。九州でも環状集落はいくつか見つかっていますが、これほどはっきりとして規模が大きいものはありません。環状集落といえば関東地方が有名ですが、少なくとも九州まで環状集落が分布していることが確実となりました。広場の中央には石を並べた配石遺構があり、広場のまわりの丸い穴は貯蔵穴と墓です。その外側には住居、高床建物、道路、捨て場などが分布します。竪穴住居は百数十棟見つかっています。黄色い土は火山灰ですが、この集落のすごいところは規模もそうですが、まずムラを造る部分の火山灰を全部削って大規模な平坦地を造っている、いわゆる大土木工事をしているわけです。また、植物を加工する石器が多く出土していることから植物食料が主であったことが推定されます。



青森県是川中居遺跡 水場遺構

青森県の是川中居遺跡ですが、縄文時代晩期の遺跡で約2500年前のものです。やはり史跡です。光記念館にもレプリカが展示されていますが、この遺跡は漆器や漆製品がたくさん出土することで有名です。遺跡のすぐ東側を新井田（にいだ）川が流れ、現在でもサケが遡上します。遺跡内の低地や沢を発掘調



査すると水場遺構が見つかりました。この水場遺構は谷を塞ぎ止めるように太い木材を置き、その両脇に木材を固定して、足場を上流側に造っています。そして、太い木材の真ん中あたりを削ずり、水が流れ出るようにしています。この太い木材の下にはこれと同じような施設が埋まっていたので繰り返し造られた施設であることがわかります。縄文人は谷のこの様な水場遺構を使って、トチのアク抜き処理などの作業をしていたようです。出土品では、とても珍しいもので、魚を獲る道具である三本のヤスを組み合わせた三つ又ヤスの柄の部分が見つかりました。非常にやわらかい木を使っていますが、石鎌を先端につけて使われま

した。掘り棒といって地面を掘り返す道具や弓もまとめて出土しています。漆塗りの櫛も見つかりました。それから、赤漆を塗った土器もあります。大きさは15cmぐらいのわりと小型の壺です。普段の日常生活で使うというより、特別な場面であるまつりや儀式に使われたものと考えられます。この土器の文様はものすごく精巧で、非常に複雑に見えます。一見複雑に見える文様も実はそうでもありません。文様を見る時、人が描いた沈みこんだ部分を見るか、そうではない部分を見るかによって印象が違います。習性で浮き上がった部分を見てしまいがちですが、低い部分の文様を見ると、ひとつのモチーフを対称に繰り返して配置することによって、複雑な文様にしていたことがわかります。文様を見ると、低い部分を見るのも楽しみ方のひとつです。こういった東北地方の土器が四国や九州からも最近では出土しています。



興隆溝（こうりゅうこう）遺跡 日中共同研究

私が以前勤務していた三内丸山遺跡対策室では中国との共同研究を進めていました。縄文時代の日本と同時代の大陸先史文化との関係をテーマとして、6年前から着手し、現地での発掘調査を3年間行いました。共同研究の場となった遺跡は、遠く青森県から西へ約1500km、北緯42度に位置する中国内モンゴル自治区に所在する興隆溝遺跡です。昨年10月、我々調査団が引き上げた



翌日には初雪が降りました。真冬には零下30度位まで気温が下がります。標高約560mで、ここ高山市と同じくらいですね。

発掘調査は朝7時から始まります。日によってはガスがかかり、作業がなかなかできないこともありましたが、ここは高精度の測量器械を持っていつているのですが、ガスがかかると使えません。風が強く、細かい土煙にも悩まされました。8時過ぎにはガスも晴れてきます。調査区のまわりはそば畑で、その真ん中を掘りました。3年間で竪穴住居を30棟ほど調査しました。集落の東側から始めて徐々に西側へ向かって調査を進めました。日本の縄文時代では方形、長方形、円形、楕円形とありますが、中国東北部では基本的に方形です。年代については中国側では約7500年前としています。しかし、もう少し新しい可能性があります。日本では縄文時代早期中頃になります。竪穴住居は大体同じ方向を向き、列状に何列にも並ぶ特徴があります。配置に規則性が見られることは、当時の社会に様々な規制があったことが想像されます。

大陸の先史文化と日本の縄文文化と比較、研究する上でいくつか興味深い発見がありました。土坑から

犬の骨がまとまって出土しました。犬は日本の縄文遺跡からもたくさん見つかっています。現在のところ「縄文人は犬を食べていないが弥生人は犬を食べた」と言われます。縄文人は食料事情が厳しくても犬を食べることはなかったし、墓に埋葬した例も見られます。ところが稲作開始とともに犬を食料とするようになったと考えられています。今回見つかった犬は埋葬された可能性が高く、食べた形跡はないようです。日本の調査団の動物考古学の専門家によると、小型で縄文犬に近いのではないかと指摘しています。縄文犬のルーツに関しては研究が進められていて、起源は南方ではないかとの指摘されています。これまで南方起源としていたのは北方の資料がほとんどないこともあり、この興隆溝遺跡の犬は縄文的な特徴を持っているので、中国東北部を含めた北方地域の資料が分析されればこれまでの説を見直すことになるのかもしれませんが。そういう意味で中国東北部も起源の候補地のひとつとなることでしょう。

遺跡一帯はアルカリ性土壌ですから、骨が腐らないで非常に良い状態で残っています。日本では古い時代の人骨が残る例が少なく、貝塚など特殊な状況でないと残らないとてされています。興隆溝遺跡の墓は住居壁際の床下に造られています。埋葬した後に床を貼り直して、また生活をしていますから、死者と共に暮らすということになります。これまで20体以上の人骨が床下の墓から見つかっていますが、その中でも珍しい埋葬状態のものがあります。おそらく男女一緒に合葬と考えられますが、同時に葬られたのか前後するのか検討しなければなりませんが、先史時代の遺跡で男女の合葬は初めての例と言われています。互いの顔を向かい合わせており、あるいは手をつないでいるのかも分かりません。この2人は全くの無関係とは考えにくく、夫婦あるいは恋人同士だったのかもかもしれません。頭のところに石がありますが、これは植物を磨り潰す際に使用された石器です。日本では石皿と呼んでいます。副葬品にも土器、石器、耳飾りなどいろいろな種類があることがわかり、それらは当時の生業や社会での立場などを示すものと考えられます。

大人と子供と一緒に埋葬された例もあります。大人は女性で、母親の可能性がありますが。同時に埋葬されたのか、それとも子供が先でお母さんが後、あるいはその逆なのか、詳しく調べる必要があります。中国の考古研究所では同時に埋葬されたものと考えています。さらに、大人の人骨と爪先を揃えるように対称の場所からさらにもう一体人骨が出土しました。これらは家族である可能性が高い。こういった多数合葬の例は今まで殆ど知られていません。今後DNA分析を行い、関係を調べていく予定です。これらの人骨は形質的には縄文人とはあまり似ていません。同時代でも日本列島に住んでいた縄文人と、これら中国東北部の人達では違います。縄文人より大柄で骨太の印象が強いです。より北方的な要素が強い感じがします。

中国東北部のこの時代にはやじりがありません。骨に溝を彫り、細石刃と呼んでいます。薄いカミソリのような石器を差し込み、槍やナイフとして使われています。出土する動物骨ではシカやイノシシの他に水牛が出たり、かなり動物を獲っていることは間違いない。淡水魚の骨もたくさん出土しています。最近の大きな発見はアワが見つかったことです。竪穴住居の床面から数百粒の炭化したアワが出てきた。分析の結果、



栽培されたものである可能性が非常に高くなった。動物や魚も獲り、採集をし、アワの栽培もやっているわけです。このアワは中国最古であり、世界最古でもあります。稲作は揚子江下流域で始まりましたが、少し遅れて中国東北部では雑穀栽培が間違いなく行われていたことになります。アワの栽培が確認されたことは非常に大きな意味を持ちます。これまで狩猟・採集文化と考えられていた中国東北部で雑穀栽培が行われていたことになる、同じく狩猟・採集文化と考えられている縄文文化に雑穀があったかどうかもっと詳しく検討する必要があります。また、その雑穀栽培に家畜が伴うのかも興味深いものがあります。イノシシは弥生時代に家畜化され、ブタになりました。興隆溝遺跡からもイノシシの骨がたくさん出土しており、ブタに似た骨もあるようですので、今後の詳しい分析を待ちたいと思います。

結 び

これまで話したことからもわかるように日本列島全体やその地域の歴史や文化の成り立ちを考える上で、地下に埋もれている遺跡である埋蔵文化財は欠かすことの出来ない貴重な文化遺産です。これらの遺跡の中には幸運にも保存される遺跡もあれば、残念ながら工事等によって跡形もなく無くなってしまう遺跡もあるということこそ是非とも知って頂ければと思います。色々な貴重な成果が上がっていても、一方ではその遺跡が無くなってしまう現実があります。貴重な情報を頻繁に発信していくことが大事で、遺跡は何も学者、研究者のためだけにあるのではないことから、地域の皆さんへまず、情報提供することが必要と考えられます。皆さんの住んでいる地域には遺跡がたくさんあり、発掘調査を行っているところもあるはずです。機会がありましたら実際に発掘調査の現場を見ていただき、我々の先祖の生活を間近で実感していただければと思います。

博物館における高齢者レミニセンス・セラピー（回想法）と アウト・リーチ活動

～光記念館高齢者福祉施設への出張美術館を事例として～

吉井隆雄
光記念館 主任（学芸員）

1. はじめに

平成17年には「国勢調査」が行われ、また団塊の世代が多数定年を迎える時期にあたり、高齢化社会に関するデータや記事が多く報道された。

現在65歳以上の方々の全人口に占める割合は18%で、5人に1人が高齢者であり、2020年には25%に達し、4人に1人は高齢者となることが予想されている。さらに2025年には高齢者独身世帯が全世帯の13.6%を占め、現在の2倍になるといわれている。社会の高齢化は着実に進行しており、博物館としても来館者の増加を考える上で避けては通れない問題である。

急速に進展する高齢者社会のなかで、医療、福祉、研究、ビジネス、そして行政などが大きく変容してきている。博物館も大なり小なり高齢者対応が迫られ、またその事が博物館としての力となり、また戦略の一つとなりうるのである。

一方高齢化社会が急速に進むわが国において、高齢者の方々が知的・精神的に健全で充実した第二の人生が送れるように、博物館の果たす役割・使命も多様化・高度化しつつある。そのような中で、大正・昭和時代の生活資料の保存・再現により、それらを活用した『高齢者へのレミニセンス・セラピー（回想法）』を行なっている博物館も存在している。

回想法に関してヨーロッパでは、60年以上も前から積極的に高齢者への伝統的な展示が展開されてきた。特にイギリス、カナダ、オーストラリアでは、数こそ少ないものの高齢者の博物館利用に着目し、評価の高い実践が行われてきた。

ここでは、全国的にまだ数少ない高齢者施設への出張美術館を「当館の高齢者対象プログラム開発」として紹介させて頂く事にする。

2. 博物館と高齢者対応の現状

日本博物館協会が発行した「博物館における高齢者を対象とした学習プログラム」の中から四国大学大学院教授：真鍋俊照氏の大変貴重な論文があるので少々長いが引用することにする。

〔博物館と高齢者の関係〕

高齢者福祉施設との連携も念頭におかなければならない。また館内の学芸・教育スタッフ側からは、高齢者に対して対面朗読システム（館側で迎えた高齢者と学芸員との対話）の確立、滞在型高齢者利用の可能性を探る、ボランティアの活用とボランティアとしての活用（博物館施設に対して高齢者の参加）が検討課題として考えられる。これからのプランは、同時に地域の社会教育施設の中核をなす新たなサービスの構築も考えられなければならない。そこから地域に根ざした社会教育の可能性を考え、生涯学習の広がりを考えることにつながるのである。

今日では、高齢者をとりまくあらゆる福祉政策の中で、高齢者と子供及び地域ネットワークシステムとの関係を念頭においた、生涯学習のワクを縦・横に広げる必要があるということである。その有力な舞台の一つが、博物館施設なのである。確かに高齢者が博物館へ関心をもつことは有意義なことである。しかし、高齢者をとりまく環境は年ごとに大きく変っている。特に目立つことは、いま述べた高齢者の家族形態は子供達、孫達との同居がくずれて、いわゆる高齢者単独世帯が増加していることである。

寝たきり高齢者には、アウト・リーチ活動（館側から要望に答えて出かけて行き、博物館の展示・話しを提供する等）の展開を余儀なくさせることになる。この活動手法はこれまで、学校週5日制にともなう小学生等への博物館誘致という発想（つまり博物館と子供）の関係を一部転換して、高齢者をターゲットにする仕組みを検討する、ということを意味する。

「高齢者は何処かに行きたい、何かを見たい、誰かと交流したいという願望を常にもっている。美術館・博物館はそれらの願望に答えてくれる場所である」と結論づけたのは、日本福祉士会副会長・いづみの苑在宅介護支援センター副センター長鈴木幸雄氏である。氏はさらにいう、高齢者の一人暮らしが増えていて、孤独を感じている人が多い。

郷土史関係者も取込んで、高齢者と痴呆の介護も含めたケアに「郷土・風土」といった歴史性・環境性を考えることで高齢者が関わる自然社会環境の結びつきを強く指摘されるのである。このことから博物館と高齢者の興味深い企画テーマを考える場合、「レミニセンス（回想法）」、「思い出」、「一昔前と私」、「大人の童話」といった自分への過去を時代・風俗・におい・お菓子・話・おもちゃ・人の活動（生活）、風景、環境等を素材に計画することは当然有効な手段になってくる。とくに「回想」に関しては、レミニセンス・セラピー（回想法）を通して、ヨーロッパでは60年以上も前から積極的な老人・高齢者への伝統的な展示が展開されている。

〔博物館の機能と受け入れ体制〕

高齢者だけの集団・団体を作るのではなく博物館という場を提供することによって、地域の子供や、壮年層、つまり社会の一員として他世代と共に学習・社会参加が出来るプログラム開発も必要なのである。

肉体的ハンデという点で博物館で一番問題となるのは高齢者に対するバリア・フリーである。この設備については、新しく建てられ、リニューアルされた館では、トイレ、エレベーター、床の段差などの車椅子での移動がスムーズに出来る配慮がされている。館内で具合が悪くなった人や、広い館内を歩行で観覧することが困難な人のために、貸し出す車椅子が用意されている場合も最近が多い。

福祉高齢者施設との連携も考慮したアウトリーチ・プログラムについて考えたい。学芸員などが施設に直接訪ねる、または出張美術館をつくることで、今まで博物館・美術館へ行ったことがない、あるいは興味がない人にも関心を持ってもらう機会をつくる。埼玉県立近代美術館の学芸員が、館内のあるギャラリースペースを使って、小学生を対象とした鑑賞教室を行なった。そのときに展示された資料は、埼玉県立近代美術館所蔵のピカソなどの名画数点だったようだ。目的は小学生にリラックスした状態で絵画を鑑賞し、親しみを持ってもらう、あるいは、色々な角度からみる絵画が普段美術館でみる時との印象の違いを感じさせるなどであった。このような出張型美術館を高齢者施設にも応用できるのではないだろうか。アウトリーチは他にも大きな可能性をもっている。これは高齢者に対するレミニセンス・セラピー（Reminiscence Therapy、回想法）と関わる例であるが、イギリスのミュージアムでは、高齢者が青春期を過ごした時代の器具や写真を集めた「思い出キット」を高齢者施設に貸し出したところ、リハビリやセラピーとしての効果

が確認されたという（「変貌する美術館」編者 加藤哲弘他 執筆 荒木夏実）アウト・リーチの出張ミュージアムは、高齢者施設内の温度や湿度、照明など資料への影響の問題はあるが、館側からアプローチする方法としては有力な手法であることは間違いない。

高齢者を対象とした芸術セラピーについて考えてみたい。この分野は専門的な知識を必要とするため、どの程度の範囲を博物館や美術館で取り入れられるか、また、この分野の研究施設との連携をどのような形にしたらいのか、その可能性について考える。この芸術セラピーに関連して、高齢者は「お絵描き」は好きだが現代アートを敬遠する傾向があるように感じられるが、逆に視力の悪い、あるいは難聴の高齢者が音響（ノイズ）や大画面映像、空間で表現する現代アートを五感で体感するという利点もある。したがって、博物館施設のうち、とくに美術館独自の高齢者対策として、種々の取り組みと工夫が強く要望されるのである。

〔高齢者と博物館と生涯学習〕

痛感することは、外国の多くは老人・福祉という諸政策が、強く博物館行政（プランニング）等の中に深く根をおろしており、生涯学習という考え方の中にごく自然につちかわれている点に注目する。

高齢者が強く願う（欲する）ものの一つは「自分の人生経験であり、過去である」。各人が歩んできた人生には、微妙に異なる人生経験が豊富にある。その経験をベースに多くの文化伝承の要求も持っている。文化伝承の要求は同次元で、また新たな（60歳・70歳から上の）文化的経験をつみ重ねることになる。そのためには、今後は高齢者の生活意識や価値観の変化を十分に配慮する必要がある。

〔高齢者と博物館活動 ―アウトリーチとレミニセンス・セラピー（回想法）―〕

手法的にはレミニセンス・セラピー（回想法）が土台になっていることは言うまでもない。この手法が、高齢者を対象とした展示品や博物館講座やギャラリー・トークで成果をあげている例は、ヨーロッパ、とくにイギリスで伝統的に根強い。安井亮氏の研究でも明らかに「海外では、数こそ少ないものの、イギリス、オーストラリア、カナダでは、早くから高齢者の博物館利用に着目し、評価の高い実践を行なっているところがある。中でも博物館の収蔵品を使いながら、過去への回想体験を通じて高齢者の生き甲斐や孤独感からの脱却を促すレミニセンス・セラピー（回想法）を使ったプログラムは高い評価を得ている」『安井亮「高齢者の可能性に海外での収蔵品を使ったレミニセンス・セラピー（回想法）の試み」』『カルチペイト』12号、夏、文化環境研究所）という報告でも、「イギリスにおいて1950年代から老人心理学の分野で、過去の事像を回想することに関心が集まり、1960年代初頭にロバート・パトラー博士等の研究により、レミニセンス・セラピーが老人の痴呆症の進行を遅らせることに有効だということがわかってきたのである。これに呼応するように、イギリス国内の博物館の教育関係者の間で過疎化が進み、孤独な生活を強いられがちな老人のための教育プログラムとして着目された」（同誌）という。

そして実施の状況は、「セラピーが行なわれる場所は、館内で行うワークショップ形式のものもあれば、老人保健施設と特別養護老人ホームや高齢者が長期的に入院している病院へ出向いた、グループ訪問（アウトリーチ）で行われることも多い」（同誌）と、やはり博物館側から出向くシステムによって成果もあがっているように考えられる。

「高齢者の生き方と生涯学習」に主眼をおいているが、ここにレミニセンスとの結びつきを推定することが出来るように思う。したがって博物館では、レミニセンスを土台とした高齢者の希望にそう用具の収集も

含めて、生涯学習の中で、日本各地の状況に応じた高齢者対策の確立を、博物館側でも真剣に取り組まなければならない時期にきているのである。その際に実践的、活動的な方法を採用したり、異なる世代との接触・交流や各人の生活課題を重視する必要があると同時に、さらに強力な癒しの空間として、これからの博物館は新たな高齢者とのよりよい関係を築きあげる必要がある。

以上抜粋であるが高齢者と博物館の関係について貴重な意見を示唆してくれている。

3. 「高齢者ボランティアおよび高齢者見学者に対するアンケート結果」について、九州産業大学美術館副館長 吉武弘喜氏は次のように報告している。

平成15年度博物館調査の結果

回答館619館（国立16、都道府県117、市区町立村316、市立170）

① 見やすい展示づくり、施設のバリアフリー化は多くの博物館で意識され努力されている。

② 課題は、展示の車イス対応、音声ガイド（常設展にあり13%）、高齢者福祉施設等へのアウトリーチ活動（実施館6.5%）

③ 高齢者に人気のある展示や行事＝昔の生活、懐かしさ、郷土、歴史、伝統、健康、宗教、皇室などがキーワード。しかし、一般に人気のあるものは多くの場合高齢者にも人気。

④ 高齢者の博物館利用は盛ん。博物館の半数が入館者の3割以上が高齢者と回答。

（平成9年末の協会調査：郷土、歴史、植物園で高齢者が特に多い。）

⑤ ボランティアを受け入れている博物館は着実に増加（受け入れ44%）、ボランティアの50%以上が高齢者であるとする館が40%。

⑥ 高齢社会に対応して博物館がとるべき対策としては、高齢者が好む展示や行事への配慮も当然見られるが、各博物館の特色を生かしながら、高齢者の知識・経験を生かして世代間の交流を促進するような事業に力を入れること、くつろげる雰囲気づくりや一層のバリアフリー化などが重視されている。

アンケートの結果より多くの美術館・博物館が高齢者を意識している事が分かる。

4. 高齢者福祉施設へのアウトリーチ活動

これまで多くの博物館が高齢者向けのプログラムを開発・実施してきた。特に東京江戸博物館、愛知県師勝町歴史民俗資料館、福井県立歴史博物館など先進的に取り組んできており、また実績を上げてきている。

ところで当館の出張美術館は、高齢者の方々の中に身体が不自由で施設から外出できない方が多くいる現状を鑑み、青少年向けに偏りがちな博物館のアウトリーチ活動を交通弱者の高齢者学習支援として行なうものである。平成15、16、17年度と3年間にわたり「芸術拠点形成事業」の委託事業に応募したところ許認可され、文化庁の事業として実施してきた。その概要について紹介する。特に当館は介護士の方々と連携を組み、十分なる打合わせを行って実施した。全国的に数が少ない博物館の高齢者福祉施設へのアウトリーチ活動として注目されるところである。

特別養護老人ホーム 豊楽園

日 時：平成15年11月19日 14:00～15:00

場 所：豊楽園ホール

対象者：55名

（1，内容

○絵画鑑賞：（浮世絵版画）葛飾北斎「富嶽三十六景」

○I T（プレゼンテーション用ソフト）を活用した作品解説

【作品解説】

本物の絵画を鑑賞して頂くと共に、プロジェクタの画面に映し出された作品に線や円や三角形などを描き加え、口頭の説明では伝えきれない内容を視覚的に図示した。

（2，所感

○老人ホームは初めてだったので、当初はどのようにさせて頂いたら良いか判らなかった。当館の担当者の一人にボランティア経験者がいたことは幸いだった。介護士の方が「ゆっくりと大きな声」で話をされていたので私共も心がけた。

○昔この浮世絵が永谷園の“お茶漬け海苔”の景品やマッチ箱の絵柄にあった事を思い出して頂いた。

○1人1人お名前を呼びかけ、本当に耳元で話をしないと理解できない方が大半だった。会話が困難な方に手を握りながら絵を説明していたら、反応が返ってきた事がある。

○絵を見て頂き、昔のことや思い出した内容を聞く事が良いようである。

○高齢者との基本は「ふれあい」であり、コミュニケーションをとる事が大切である。

○高齢者の方にお歳を聞いて、90歳まで長生きした北斎と比べたりすると関心を示された。

○絵が好きで、御自分でも絵を描かれるという方に特に喜ばれた。その方は御自分の作品を私共に見せて下さった。

（3，介護士に対するアンケート結果

○今後も午後のレクリエーションの時間の中での利用を希望する。

○脳への刺激、特に痴呆老人へのリハビリ的機能への期待が出来るのではないと思う。

○大変判りやすい説明で好評であった。I T（パワーポイント）を活用した展示説明など次回も期待する。

○素晴らしい作品を有り難うございました。



特別養護老人ホーム 新宮園

日 時：平成15年12月3日 14:00～15:00

場 所：新宮園ホール

対象者：50名

（1，内容

○絵画鑑賞：（浮世絵版画）葛飾北斎「富嶽三十六景」

（2，所感

○それ程耳元でなくても、大きな声で話せば理解して頂ける方が大半だった。

○全体的に説明に対する理解度も高く、反応も良かった。

○開始前に「どんなに高価な絵を見せられても説明してもらわないと価値などわからん。」と何度もおっしゃっていた方が、説明後は神妙になられ、ご理解頂けたようであった。

（3，介護士に対するアンケート結果

○今後も利用したい。

○数多くの美術品等を鑑賞する事によって、入居者の方々に豊かな生活を送って頂きたい。

○入館者は外出する機会が少ないので大変好評だった。



各社会福祉施設における共通の報告事項

○今後、日本が高齢化社会に向かう事を考えた場合、当館としてはこの分野での取り組みの必要性を強く感じている。

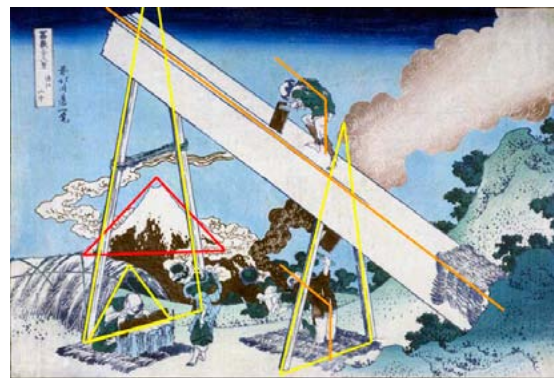
○幸い、地域の介護士の方が大変協力的であるので「博物館」と「社会福祉施設」とを十字に組み、連携を密にして行きたい。

○高齢者の方々が楽しめ、元気がでるような内容、癒しの空間を目指したい。

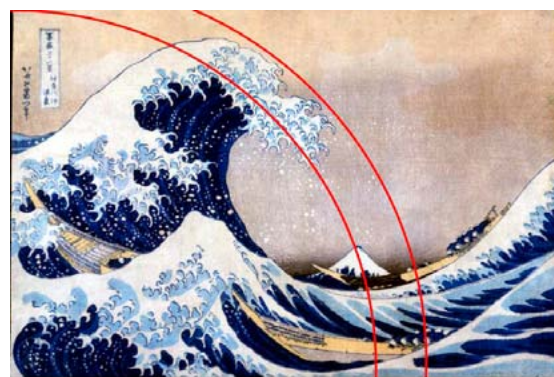
○出張美術館として現在考えている新案は、「ITを活用した回想法の試み」である。これは「大正・昭和の生活用具」を画像（プレゼンテーション用ソフト）で見せ、昔を思い出して頂くというものである。

○また、美術の分野では「広告のデザイン」を取り上げてみたい。これは、例えばビールや石鹸などの昔懐かしい広告を見せ、記憶をよみがえらせて頂こうという試みである。生活の中で大きな情報源となる広告を利用して、新たなチャレンジをしてみたい。

○その他、本物の絵画等を持ち込む事は今後行うが、保存の関係上困難な作品もある。介護士の方と相談したが、その場合ITを活用した画像でも十分なので行って頂きたいとの事である。ITを活用した事業は今後、博物館活動でも大きな位置を占めるだろう。



遠江山中



神奈川冲浪裏

特別養護老人ホーム 豊楽園

日時：平成16年11月15日 14:00～15:00

場所：豊楽園ホール

対象者：約30名

（1、内容

○回想法：「ちょっと昔の道具たち」の映像

○絵画鑑賞：（浮世絵版画）歌川広重「東海道五十三次」の12点

（2、手法

○ITを活用して昭和20～30年代に使用された道具や看板、ポスター、また駄菓子やおもちゃ等の静止画像を見て頂き、実際にその道具を使用された、あるいは身近にあって親しんだという高齢者に、自由に発言して頂いた。

○かつて永谷園の“お茶漬け海苔”に付いていた「東海道五十三次」のミニチュアカードを配り、昔を懐しんで頂いた。

○食堂の3ヶ所のテーブルにそれぞれ4枚の浮世絵版画（額入り）を配置し、高齢者には3つのテーブルに分散して座って頂いた。解説員が1つのテーブルで作品4点について10分間説明をさせて頂き、10分経ったら作品を移動して、次のテーブルで別のグループに同じ4点の説明をさせて頂くということを3回繰返した。

（3、介護士に対するアンケート結果

○普段から美術品を目にする機会が少ないので、皆さん興味深そうに見ていらした。

○本物が見られたという事で大変喜んでいらした。

○よい刺激になったと思う。機会があったらまた是非お願いしたい。

（4、所感

○開始前の空き時間に、集ってこられる高齢者に積極的に声をかけさせて頂き、お名前やお歳を伺った。高齢者の方々は喜んでお答え下さった。

○ITを活用した回想法が思った以上に好評で、ほとんどの方が知っている（馴染みの）物の静止画が映し出された際など、拍手や歓声上がるほどだった。

○道具などの静止画が映った際「これについてご存

知の方、教えて下さい。」と問いかけたところ、あちらこちらから声上がり、詳しいことを知っている高齢者が、懐かしげに色々とお話下さった。

○会場内が活気に充ちていた。

○永谷園の“お茶漬け海苔”に付いていた歌川広重「東海道五十三次」のミニチュアカードを配った際には、皆口々に「懐かしい」とおっしゃり、裏面の解説文の文字が小さくて読めない等と言いながらもしきりに読もうとされていた。

○浮世絵版画「東海道五十三次」を、それまでうつらうつらされていたある高齢者の、お顔のすぐ近くまでお持ちしてご覧頂いたところ、その方は目をパッチリ見開いて凝視され、「いいねえ!これいいねえ!」を連発された。本物の良さに感動して頂けたことを肌で感じさせていた瞬間だった。



特別養護老人ホーム 新宮園

日 時：平成16年12月3日 14:00～15:00

場 所：新宮園 食堂

対象者：約55名

（1，内容

○回想法：「ちょっと昔の道具たち」の映像（約17分）

○絵画鑑賞：（浮世絵版画）歌川広重「東海道五十三次」の12点（約30分）

（2，手法

○ITを活用して昭和20～30年代に使用された道具や看板、ポスター、また駄菓子やおもちゃ等の静止画像を見て頂き、実際にその道具を使用した、あるいは身近にあって親しんだという高齢者に、マイクを向けて発言して頂いた。

○食堂の3ヶ所のテーブルにそれぞれ4枚の浮世絵版画（額入り）を配置し、高齢者には3つのテーブルに分散して座って頂いた。解説員が1つのテーブルで作品4点について10分間説明をさせて頂き、10分経ったら作品を移動して、次のテーブルで別のグループに同じ4点の説明をさせて頂くということを3回繰り返した。

（3，介護士に対するアンケート結果

○絵を一对一で説明して頂けたばかりでなく、貴館の職員が当園のお年寄りと接触して頂けたのが大変良かった。有り難かった。

○パワーポイントによる回想法も良かった。広重よりも『東海道五十三次』よりも、むしろ懐かしい道具たちの方に、高齢者の方々は反応していたように見受けられた。

○昔の音楽を流すなど、音楽的な要素を盛り込むとより良いのではないかな。

（4，所感

○ITを活用した回想法を始めても、しばらくは反応がおとなしかった。

○高齢者の中に入ってインタビュー形式でマイクを向けたところ、ぼつぼつとお話をして下さるようになり、次第に和やかになっていった。

○お話をして下さい方は限られており、豊楽園の高

齢者に比べるとおとなしく感じられた。学校やクラスによって児童・生徒の反応が違うように、老人ホームにも違いがあると感じた。

○開始時間のかなり前から集ってこられる高齢者に、豊楽園の時ほど積極的にお声をかけさせて頂いていなかったため、高齢者がテンションを上げるのに時間がかかったとも考えられる。



特別養護老人ホーム 南風園

日 時：平成16年12月13日 14:00～15:00

場 所：南風園ホール

対象者：約30名

（1，内容

○回想法：「ちょっと昔の道具たち」の映像

○絵画鑑賞：（浮世絵版画）歌川広重「東海道五十三次」の12点

（2，手法

○ITを活用して昭和20～30年代に使用された道具や看板、ポスター、また駄菓子やおもちゃ等の静止画像を見て頂き、実際にその道具を使用した、あるいは身近にあって親しんだという高齢者に、自由に発言して頂いた。

○かつて永谷園の“お茶漬け海苔”に付いていた「東海道五十三次」のミニチュアカードを配り、昔を懐しんで頂いた。

○食堂の3ヶ所のテーブルにそれぞれ4枚の浮世絵版画（額入り）を配置し、高齢者には3つのテーブルに分散して座って頂いた。解説員が1つのテーブルで作品4点について10分間説明をさせて頂き、10分経ったら作品を移動して、次のテーブルで別のグループに同じ4点の説明をさせて頂くということを3回繰り返した。

（3，介護士に対するアンケート結果

○高齢者が大変喜んでいらしゃった。

○今後も是非「出張美術館」を利用させていただきたい。

○回想法のCDをお借りしたい。

（4，所感

○道具などの静止画が映った際「これについてご存知の方、教えて下さい。」と問いかけたところ、詳しいことを知っている高齢者が、懐かしげに色々とお話下さった。



各社会福祉施設における共通の報告事項

回想法について

○光記念館では、江戸東京博物館や福井県立歴史博物館のように、昭和 30 年代の施設を復元するなどの回想法はできないが、IT を活用した高齢者対応プログラムでも充分回想法の効果が上がることがわかった。手軽にできる回想法としては今後十分期待が持てる。しかし、当館としては介護士との連携は十分取っているが、医師との連携がまだまだ不十分である。医学的見地を考えた場合医師との連携は不可欠であり、今後の対応を考えたい。

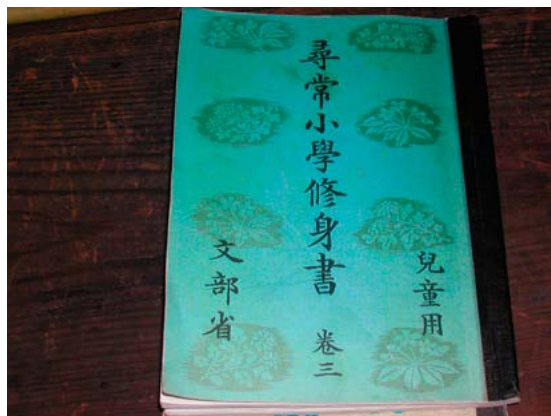
○老人ホームにうかがう際には、出張美術館の開始前から高齢者とコミュニケーションをとるよう心掛け、高齢者が和んでこられた段階で出張美術館を開始するとよい。そのようにすると、高齢者が打ち解けて下さりやすいようである。

○施設によって反応に若干の違いはあるが、「古い道具のことなど私たちにはわからないので、是非お話を聞かせて頂きたい」という姿勢で伺うと、いろいろとお話下さる。先人の方々のお話は貴重である。

○ぼそぼそとお話をされている方を逃さず、そういう方にマイクを向けて、ひとりの話を全員が聞けるようにすると、皆の気持ちが集中し、話も次に進めやすいが、マイクを使わず、それぞれが各々の場でしゃべってしまうと全体としてのまとまりがつかず、うまく進行していかない。

○老人ホームでも、特別擁護施設でも、当館の解説員が 1 グループに約 10 分間（作品 5 点）の説明をし、作品をもって移動して次のグループにまた 10 分間説明をするということを 3 回行なった。致仕方ないことながら、5 点を移動させている間の時間が惜しい気がする。

○懐かしい画像は、昔の記憶を甦らせる。来年度は「もう一度聞きたいあの音」と題し、懐かしい画像に音楽を組み込んで回想法のレベルアップに努めたい。



シニアホーム高山

日時：平成 17 年 11 月 21 日 14:00 ~ 15:00

場所：シニアホーム高山

対象者：約 30 名

(1、内容

○「五感を使う」回想法：IT とハンズオンを活用した高齢者対象プログラム

○絵画鑑賞：江戸時代肉筆浮世絵 5 点

(2、手法

○木の香りが染み込んだ和紙を配り、懐かしい音を聞きながら香りを嗅ぐことで、昔を思い起こして頂いた。

○IT を活用して昭和 20 ~ 30 年代に使用された道具などの映像や、それにまつわる音を流し、実際にその道具を使用した事のある方、あるいは身近にあって親しんだというお年寄りに、自由に発言して頂いた。

○お盆に昔の遊び道具をのせ、お年寄りのところを移動しながらコミュニケーションをとり、昔の遊びを教えて頂いた。

○食堂の 5 ケ所に、それぞれ 5 点の肉筆浮世絵を展示し、お年寄りに鑑賞して頂いた。所要所に解説員が付き、説明を行なった。

(3、介護士に対するアンケート結果

○今後も是非利用したい。

○回想法は認知症予防に大変効果があると思う。

○少人数で回想法を行なうとより効果が上がると思う。

○終了後もホームのお年寄りが集まり、楽しそうに昔話をしている姿が見られた。

○もう少し事前の打ち合わせがあるとスムーズだったと思う。

(4、所感

○道具などの静止画や懐かしい音が流れると、あちらこちらから口々に声が聞こえ、話しているお年寄りにマイクを向けると、懐かしげに色々なお話を下さった。

○昔のおもちゃを渡すと楽しそうにお年寄りが遊び方を教えて下さった。

○肉筆浮世絵の鑑賞を行なう際、順路をはじめから決めておけばもっとスムーズだったと思う。



特別養護老人ホーム 豊楽園

日時：平成 17 年 12 月 6 日 14：00～15：00

場 所：豊楽園ホール

対象者：約 30 名

（1、内容

○「五感を使う」回想法：IT とハンズオンを活用した高齢者対象プログラム

○絵画鑑賞：江戸時代肉筆浮世絵 5 点

（2、手法

○木の香りが染み込んだ和紙を配り、懐かしい音を聞きながら香りを嗅ぐことで、昔を思い起こして頂く。

○IT を活用して昭和 20～30 年代に使用された道具などの映像や、それにまつわる音を流し、実際にその道具を使用した事のある方、あるいは身近にあって親しんだというお年寄りに、自由に発言して頂く。

○テーブルに昔の遊び道具を用意し、お年寄りとのコミュニケーションをとりながら昔の遊びを教える。

○ホールの壁際 5ヶ所に、それぞれ 5 点の肉筆浮世絵を展示し、お年寄りに順路に従って鑑賞して頂く。要所要所に解説員が付き、説明を行なう。

（3、介護士に対するアンケート結果

○来年も利用したい。

○本物の作品を鑑賞でき、皆さん真剣に鑑賞されていた。

○鑑賞の時間をもう少し長くするとより多くの方に見て頂くことが出来ると思った。

○4～6 月や 10 月頃の開催も検討して頂きたい。

○回想法では道具の使い方などを思い出し、楽しそうに話している姿が印象的だった。

○紙風船や風車、おはじき等、昔のおもちゃを見る目が輝いていた。

（4、所感

○開始前の空き時間にお年寄りとのコミュニケーションをとるよう心掛けた為、「回想法」を開始した際、お年寄りの方から積極的に声をかけて頂いた。

○道具などの静止画や懐かしい音が流れると、あち

らこちらから口々に声が聞こえ、話しているお年寄りにマイクを向けると、懐かしげに色々なお話を下さった。

○昔のおもちゃコーナーでは、体が不自由な方も昔を思い出して、風車や紙風船などで遊ばれていた。

○体が不自由な方に紙風船を渡すと、必死で打とうと努力され、出来なかったラリーが数分後には出来るようになった。



特別養護老人ホーム 新宮園

日時：平成 17 年 12 月 8 日 14：00～15：00

場所：新宮園

対象者：約 40 名

（1、内容

○「五感を使う」回想法：IT とハンズオンを活用した高齢者対象プログラム

○絵画鑑賞：江戸時代の肉筆浮世絵 5 点

（2、手法

○木の香りが染み込んだ和紙を配り、懐かしい音を聞きながら香りを嗅ぐことで、昔を思い起こして頂いた。

○IT を活用して昭和 20～30 年代に使用された道具などの映像や、それにまつわる音を流し、実際にその道具を使用した事のある方、あるいは身近にあって親しんだというお年寄りに、自由に発言して頂いた。

○テーブルに昔の遊び道具を用意し、お年寄りとのコミュニケーションをとりながら昔の遊びを教える。

○食堂の壁際 5ヶ所に、それぞれ 5 点の肉筆浮世絵を展示し、お年寄りに順路に従って鑑賞して頂いた。要所要所に解説員が付き、説明を行なった。

（3、介護士に対するアンケート結果

○去年より参加者が増加した。

○お年寄りは絵画の鑑賞よりも、回想法の方に興味を持っていたように思う。

○回想法は今回のように、大きな画面に映し出す「シアター形式」の方がお年寄りも見やすい。

○紙風船など昔のおもちゃを懐かしがる方も多く、このような遊び道具を使うことでより効果が上がると思う。

○年に 2～3 度回想法を行なうことで、認知症の予防に役立つと思う。

○出来れば年 1 回だけの行事ではなく、博物館と福祉施設が連携した療法として、年に数回行ないたい。

（4、所感

○道具などの静止画や懐かしい音が流れると、あち

らこちらから口々に声が聞こえ、話しているお年寄りにマイクを向けると、懐かしげに色々なお話を下さった。

○昔のおもちゃコーナーでは、お年寄りがどんどん集まってこられ、昔を思い出しながら遊び方を教えて下さった。

○紙風船ラリーを行うお年寄りが随所に見られ、ラリーを行う間に自信をつけられたようで「今度孫に教えてあげたい」「孫が来たとき、一緒に遊ぼうと思う」と涙ぐみながら話す方も数名いた。



特別養護老人ホーム 南風園

日時：平成 17 年 12 月 14 日 13：30～14：30

場 所：南風園ホール

対象者：約 30 名

（1、内容

○「五感を使う」回想法：IT とハンズオンを活用した高齢者対象プログラム

○絵画鑑賞：江戸時代の肉筆浮世絵 5 点

（2、手法

○木の香りが染み込んだ和紙を配り、懐かしい音を聞きながら香りを嗅ぐことで、昔を思い起こして頂いた。

○IT を活用して昭和 20 ～ 30 年代に使用された道具などの映像や、それにまつわる音を流し、実際にその道具を使用した事のある方、あるいは身近にあって親しんだというお年寄りに、自由に発言して頂いた。

○テーブルに昔の遊び道具を用意し、お年寄りとのコミュニケーションをとりながら昔の遊びを教えて頂いた。

○ホールの壁際 5 ケ所に、それぞれ 5 点の肉筆浮世絵を展示し、お年寄りに順路に従って鑑賞して頂いた。要所要所に解説員が付き、説明を行なった。

（3、介護士に対するアンケート結果

○年に 2 ～ 3 回は出張美術館を行なって頂きたい。

○今後也是非利用したい。

○回想法の懐かしい映像を見ることが出来て良かった。

○もう少し暖かい季節に行ないたい。

（4、所感

○江戸時代の肉筆浮世絵を説明したところ、大変興味をもって聞いて下さった。

○道具などの静止画や懐かしい音が流れると、あちらこちらから口々に声が聞こえ、話しているお年寄りにマイクを向けると、懐かしげに色々なお話をして下さった。

○昔のおもちゃコーナーでは、体が不自由な方も昔を思い出し、風車や紙風船などで遊ばれていた。



各社会福祉施設における共通の報告事項

回想法について

○前年度の出張美術館で、IT を活用した高齢者対応プログラムでも充分回想法の効果があることがわかった。今回は音や香り、昔の遊び道具など五感を使った回想法を行ない、さらにグレードアップを図った。

○テーブルに昔の遊び道具を用意し、お年寄りとのコミュニケーションをとるよう心掛けた。特に紙風船は、体が不自由なお年寄りでもお渡しすると一生懸命打ち返そうとされ、数分後、ゆっくりではあるが打ち合いが出来るようになる例が多く見られた。

○お年寄りとの昔の遊び道具でコミュニケーションをとる間に自信を取り戻し、「今度、孫に教える」と涙ぐむ方も各施設とも若干見ることが出来た。

○施設によって反応の違いはあるが、古い道具の映像と一緒に音を流すことで、昔の記憶が思い起こされやすいようである。

○お話をしている方にマイクを向ける為、マイク係りは 2 人いた方が良いと思われる。そのようにすると話も次に進めやすいが、司会進行者との連携が不可欠である。

○今回はじめて大きな作品を特別養護施設に持ち込んだ。車椅子の方が多い為、あらかじめ順路を決め、当館の職員が解説できるようにした。

○介護士の方より、年に 1 回だけ行なうのではなく、博物館と福祉施設が連携して年に数回行なうことで、認知症の予防になるという意見を多く頂いた。

○江戸時代後期の肉筆浮世絵（美人画）を展示したところ、女性は特に着物に興味を示しており、「自分のおばあちゃんが同じ格好をしていた」との返答が返ってきた。

○現在福祉施設に入居されている方々は、戦後の日本の復興から高度経済成長期頃に、社会の中堅層として活躍した方々である。入居者が一番元気であった昭和 25 年～ 40 年代頃に使用された物などの画像を使用すると、特に懐かしく思い出そうである。

○今回行なった美術鑑賞と回想法は、「芸術の秋」という事で大変評判がよく、今後の継続を全ての施設から要望されている。

	音	時間		映像	進行（「」内はコメント案）
1				修身書	（停止映像）
				↓(映像停止のまま)	(スタッフは檜シートを配る)
					「子供の頃を思い出して下さい」
2	ホトトギス	0:00			<目をつぶって頂く>
	川のせせらぎ	0:20			檜シートを嗅いで頂く
	(ホトトギス終了)	(0:25)			
	水車	1:00	1:00	水車	<目を開けて頂く>
	(水車終了)	(1:15)		↓(映像停止のまま)	「昔の家にこういう物は無かったですか？」
3	機織の音	0:00			「何の音ですか？」
			0:20	機織り機	「機織りやわらじ作りの仕事をしていた方はいませんか？」
	(機織の音終了)	(0:30)		↓(映像停止のまま)	「昔は家の中の仕事もたくさんありました」
4	大八車	0:00	0:00	大八車	「懐かしい大八車ですね、何を運びましたか？」
			0:15	自転車	「家の外ではこういった自転車が走っていたでしょう？」
			0:25	三輪自動車	「今では見られないこういう自動車も走ってましたね」
	(フェイドアウト)	(0:30)		↓(映像停止のまま)	
	(フェイドアウト終)	(0:35)			
5	石臼	0:00	0:00	石うす	「この音は？石臼ですね」
					「ひくのは子供の仕事でしたか？どのようにして使いましたか？」
			0:15	たらい	「洗濯板が見えます、家ではこういった物が使われていませんか？」
			0:25	かまど	「お台所には竈がありましたね」
	(フェイドアウト)	(0:30)		↓(映像停止のまま)	「ここでお母さんが美味しいお料理を作ってくれたのではありませんか？」
	(フェイドアウト終)	(0:35)			
6			0:00	ちゃぶ台	「昔の家にはこういったちゃぶ台がありましたね」
	鯉節を削る音	0:10			「何の音でしょうか？鯉節はこうやって削りませんでしたか？」
			0:25	乳母車	(鯉節を渡し、実際に削って頂く)
	(フェイドアウト)	(0:30)		↓(映像停止のまま)	「昔の子供達はお家のお手伝いを良くしたのではないですか？」
	(フェイドアウト終)	(0:35)			
					「子供の頃はどのような遊びをしましたか？」
					「その頃を思い出してみして下さい」
7	カッコウ	0:00			「朝がきたら尋常小学校にかよっていませんか？」
	(フェイドアウト)		0:10	服	「昔の子供たちは着物を着ていましたね」
	下駄	0:20			「何の音でしょう？昔は下駄を履いていましたね」
			0:30	修身書	「修身の教科書でたくさんの事を勉強しませんでしたか？」
	(フェイドアウト)	(0:35)			
	(フェイドアウト終)	(0:40)			
			0:45	桃太郎物語	「読み方の勉強もありましたね」
			0:55	ストーブ	「冬にはストーブで家からのお弁当をこうやってあたためませんでしたか？」
				↓(映像停止のまま)	
8	花いちもんめ	0:00			「何か聞こえてきました」「昔は外で元氣よく遊んでいましたね」
			0:15	紙芝居	「紙芝居を見てお菓子をもらいませんか？」
	お手玉	0:25	0:25	お手玉	「懐かしいお手玉です」
	(フェイドアウト)	(0:35)	0:35	けん玉	「けん玉名人を競いましたか？」
	(フェイドアウト終)	(0:40)			
			0:45	ペーごま	「ペーごまはどうやって遊びましたか？」
				↓(映像停止のまま)	
9			0:00	駄菓子屋	「駄菓子屋さんへお菓子を買いに行きましたか？」
			0:10	〇ッチューイカゝゝ	「駄菓子屋さんの中はこういった感じでしたか？」
			0:20	かき氷	「夏には氷屋さんでかき氷を買いに行きましたか？」
			0:30	テレビ(道具たちより)	「今では一家に一台あるテレビも、この時代は電気屋さんに見に行きましたね」
				↓(映像停止のまま)	
10	鳶 (BGM風に)	0:00			
	豆腐屋のラッパ	0:15			「この音は何ですか？夕方お母さんからお使いを頼まれませんでしたか？」
	(フェイドアウト)	(0:25)			「楽しかった一日、夕暮れとともにお家に帰らなくてはなりません」
	(フェイドアウト終)	(0:30)			
					<目をつぶって頂く>
11	波	0:00			「昔子供だった頃は自然いっぱいの中で遊びました」
	風鈴	0:10			「子供だった頃の何がみえましたか？」
	(波終了)	(0:15)			
	竹林の風の流れる音	0:25			
	(風鈴終了)	(0:30)			<目を開いて頂く>
	(竹林フェイドアウト)	(0:35)			「皆様が集いて来て下さったからこそ現在の日本があります」
	(竹林フェイドアウト終)	(0:40)			「長く生きていらしゃった皆様から、
					昔の良い所を是非次の世代に引き継いで頂きたいと思います」
					「その他アドリブ…」
					「本日はありがとうございました」
					※その他随所アドリブにて行なう。
					※お年寄りからコメントを頂いている時は一時停止。
					※昔のおもちゃをテーブルに並べて遊べるコーナーを設置しておく

5. 結論

今後のレミニセンス・セラピー（回想法）を中心とした高齢者対象のプログラムは、博物館にとり益々重要となるであろう。また、その中でも地域、館の実状、予算、人手等各館、様々なやり方を工夫されるであろう。

また、音楽療法など博物館のみならず、多くの他分野の方々と連携をくみ、生涯学習の一環として役立つ事が可能である。

特に、今、核家族がさけばれている。昔は、祖父、祖母、父、母、兄弟がいる事が当たり前であり、日本人の人格形成に大きな役割を担ってきた。

レミニセンス・セラピー（回想法）を中心とした展示が親子三世代の交流に役立つ事は明白である。私共が大変お世話になりご指導下さった岐阜市歴史博物館は毎年「一寸昔の道具たち展」を開催している。この企画展の内容が小学校3・4年の社会の教科書に出てくる事もあり多くの小学生が来館し楽しんでいる。

また、地域の方々がこの企画展の解説の為にボランティアとして活躍し、また教える事を楽しみ、生きがいにしている。それは古き良き日本を見る想いである。

現代はお金さえあれば何でもできるという風潮がある。しかし、これではどこまでも利己主義になり、他人の立場を考える事ができない人間になってしまう。

レミニセンス・セラピー（回想法）を通した企画展は認知症予防にもなるが、今失われた日本を復活させる事も可能かもしれない。

古き良き日本の伝統、先人の知恵に学ぶ姿勢を築き上げるためにも、高齢者の方々の活躍とそれを活かす事のできる博物館は友人を超えた世代の交流の場であり、今後益々重要な位置を占める事になると思われる。

参考文献

- 日本博物館協会「博物館における高齢者を対象とした学習プログラム開発」
- 日本博物館協会「博物館の望ましい姿」
- 日本博物館協会「誰にもやさしい博物館作り事業高齢者対応」
- 日本博物館協会「博物館研究 NO.448」
- 神奈川県博物館協会 会報 第 76 号

平成16・17年度 光記念館 研究紀要 人文科学 第4号

平成18年4月1日発行

編集・発行 光記念館

〒506-0051 岐阜県高山市中山町175

TEL 0577-34-6511

FAX 0577-34-6065

<http://www.h-am.jp/>